

三重・古墳時代の馬文化

— 続・三重県内出土の古墳時代馬具集成 —

山 中 由紀子

1 はじめに

筆者は以前、三重県内の馬具集成の機会を与えられ、その作業を行なった（以下、「前稿」と称する）^①。集成については県内全ての資料を集成するという目的のもと行なったものの、筆者の力量不足から全てを資料化することができず、不備もあった。また、紙数の関係もあり集成作業を受けての検討・考察を行なうことはできなかった。

これらの反省から、再度県内の不時発見等の記述を洗い出し、より正確な集成作業を行なうことを第1の目的とした。次に、遺物の所在が確認できる例で、実測図が公開されていないものについて実測を行なうことを第2の目的とする。そして、それから見えてくる三重県内出土の古墳時代馬具について検討・考察するという作業を行う。

2 集成

第1表は前稿の集成表を元に行っているが、新たに発見したものについてはその後に加えて番号を与えている。前回掲載した部分のうち、欄外に※印がつけてある例については今回の調査で判明し、加筆したものである。前回掲載した実測図や詳細については必要のない限り本稿には載せていない。前稿を参照されたい。

(1) 前稿で触れた例^②

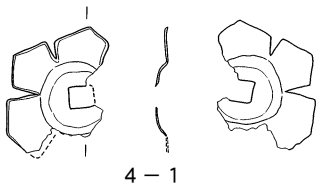
新井水掛遺跡（4-1） 奥壁・側壁石の掘り込み痕と玄室床面の敷石のみ検出し、側壁の掘り込み痕から両袖式もしくは左片袖式横穴式石室と思われる^③。玄室内の出土遺物は原位置を保っていない。馬具は、鞍の座金具（1）と小片1片で、いずれも鉄製である。座金具は約半分が欠損し、花卉状の突起が現状では3弁であるが、本来は6弁つくものと思われる^④。小片は、鞍座金具の破片とするには半球部の立ち上がりがきつく、器高もあることから半球形辻金具の半球部とされているものである。筆者も実見したが、半球部から脚部へと繋がる部分にあたると思われるが、確証はもてず、とりあえずその可能性について言及するに止めたい。

太岡寺3号墳 6基の古墳群である。東名阪自動車道建設に伴い消滅した。鉄鏃など多量の鉄製品が出土しているが、馬具の出土は一部文献に触れられているのみで詳細は不明である。太岡寺古墳群出土遺物は未整理の状態で、中には一括で「第3」「第5」などと書かれたカードが入れている箱もあった。そのため、出土遺構と遺物が混乱している可能性も捨てきれないが、その記述に基づく、3号墳からは木芯鉄板張壺鐙の壺部吊金具と思われる金具が一对分出土している。他に、馬具の可能性のある金具が2点出土している。

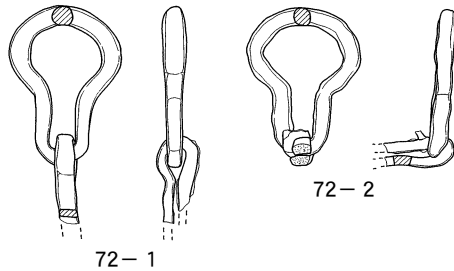
河田B2号墳^⑤（35-1～5） 直径12.0mの円墳で、内部主体は木棺直葬である。馬具は方形立聞素環鏡板付轡一对、鐙一对分（図化していないが、吊金具はもう1点存在する。）、鞍金具一对がある。本例の轡の特徴は振り引手をもつ点であるが、錆による破損が著しく、振りの基点や範囲までは観察できない。向かって右側の引手の銜金具と連結する円環部は、銜先環と連結してから曲げて環を造っている。素環部の下部、本来引手と銜が当たっていた部分の鉄棒は他の部分に比べて細い。このことから、この轡は使用されたもので、引手の円環部は補修により再度円環を造ったのではないだろうか。図化はしていないが、鞍金具は円形座金具に鉸具が取り付けものである。鐙は、三条の兵庫鎖に吊金具がつき、吊金具裏側には木質が残存する。

河田B3号墳^⑥（36-1・2） 直径10.0mの円墳で、内部主体は木棺直葬である。鉸具2点（1・2）が出土している^⑦。鐙の鉸具にしては鉄棒が細く、他の帯革についたものであろうか。

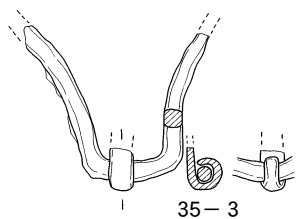
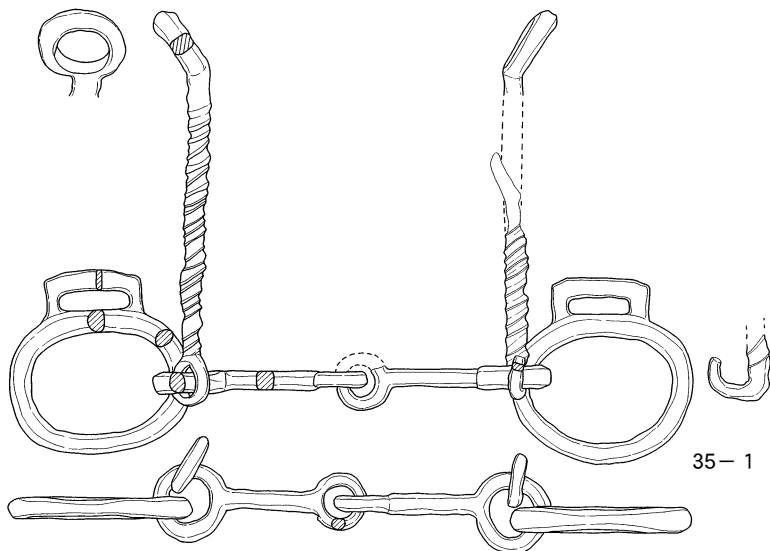
新井水掛遺跡 (4-1)



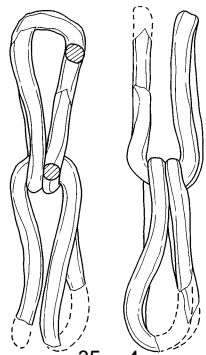
太岡寺6号墳 (72-1・2)



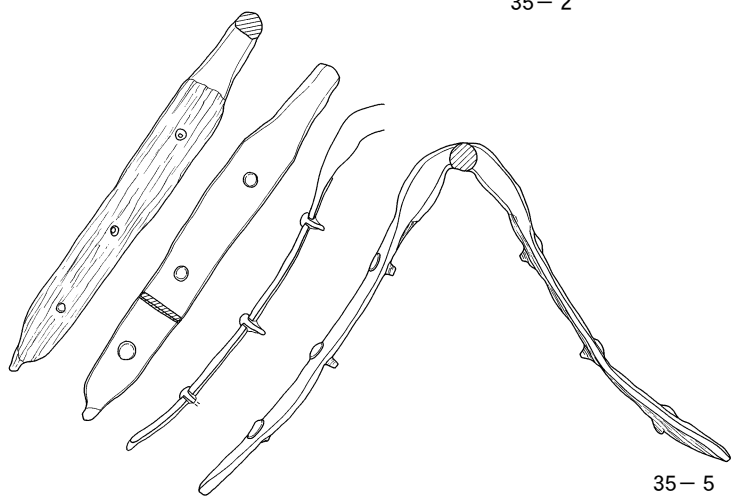
河田B2号墳 (35-1~5)



35-3

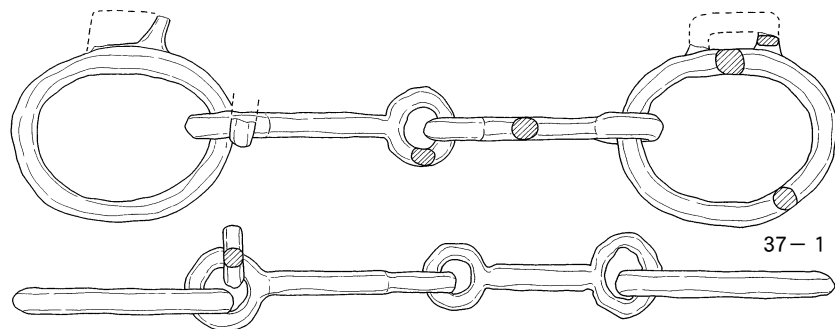


35-4



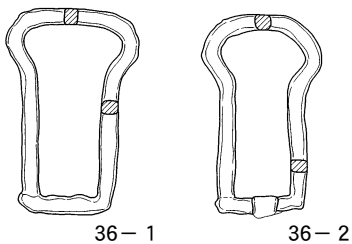
35-5

河田D6号墳 (37-1)



37-1

河田B3号墳 (36-1・2)



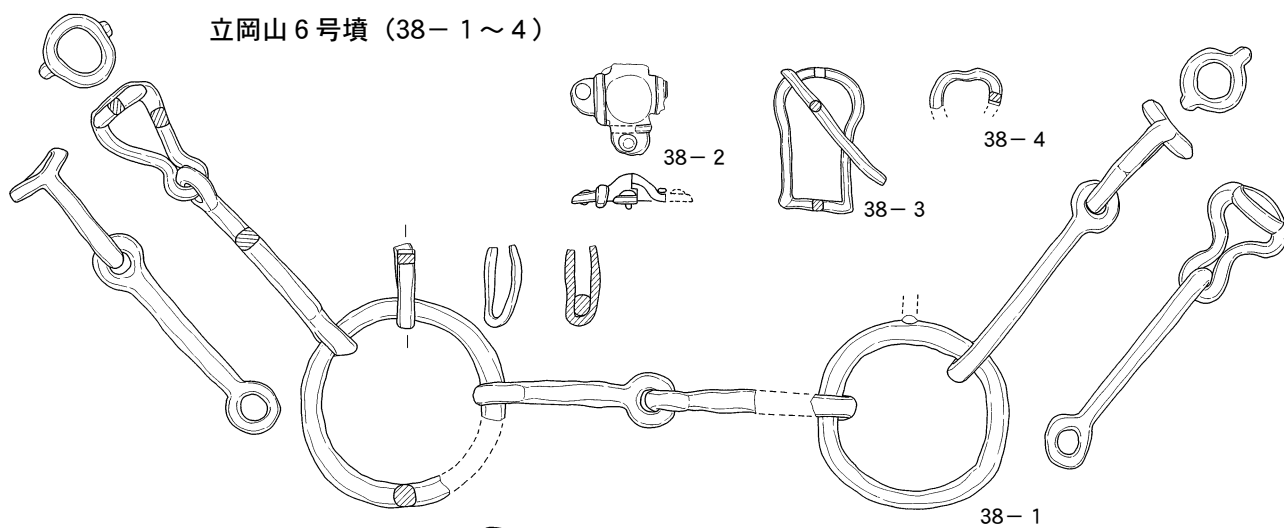
36-1

36-2

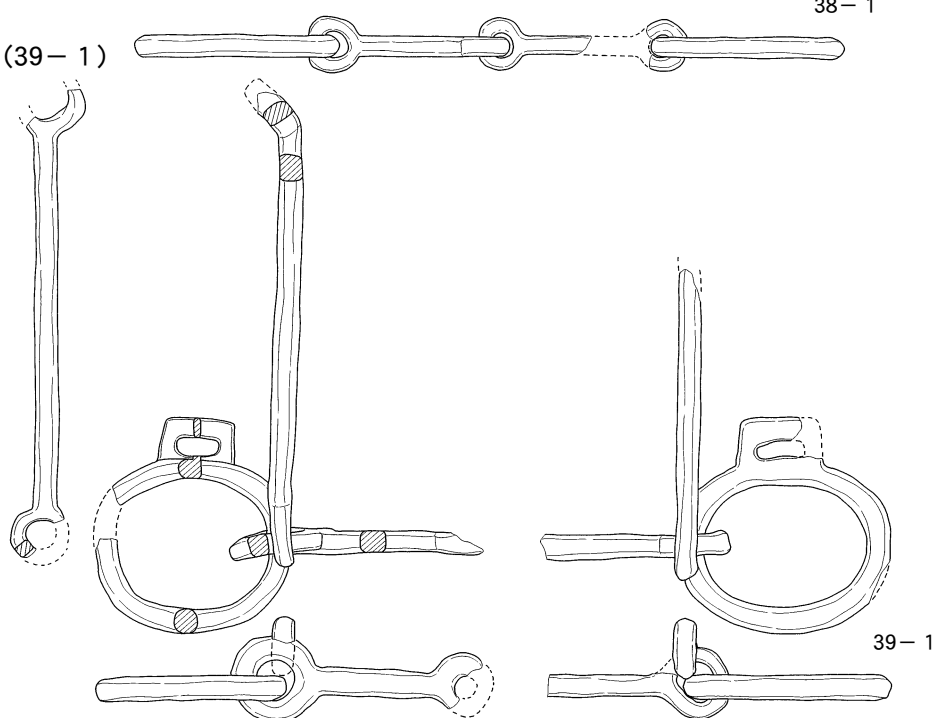


第1図 新井水掛遺跡、太岡寺6号墳、河田B2・B3・D6号墳出土馬具 (S=1:3)

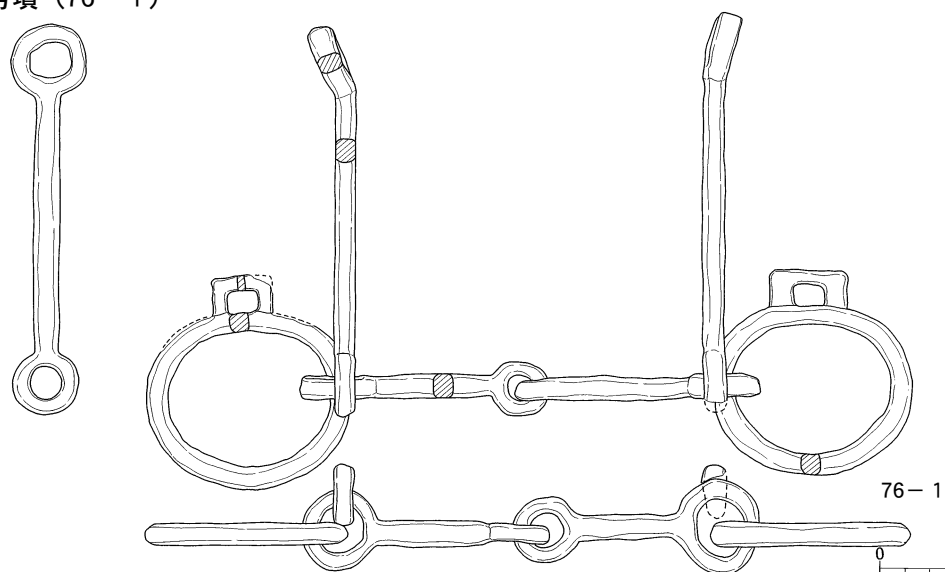
立岡山 6 号墳 (38-1 ~ 4)



明気 1 号墳 (39-1)



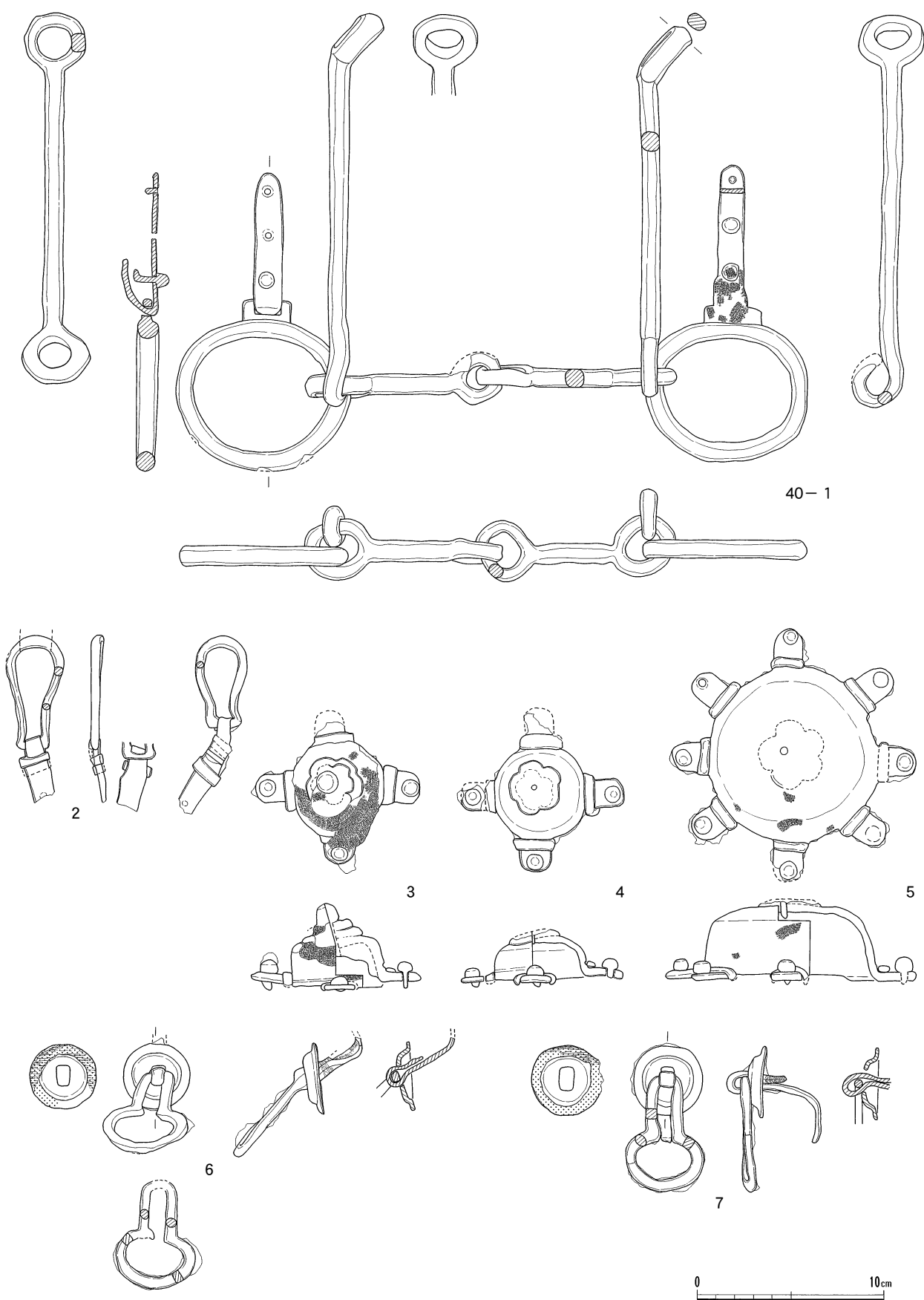
明気 4 号墳 (76-1)



第 2 図 立岡山 6 号墳、明気 1・4 号墳出土馬具 (S = 1 : 3)



石塚谷古墳 (40- 1 ~ 7)



第3図 石塚谷古墳(1)出土馬具 (S = 1 : 3) (※アミカケは漆付着範囲)

河田D6号墳^⑧（37-1） 方形立聞素環鏡板付轡（1）が出土している。引手金具は欠損しているが、銜金具と引手金具を直接連結する形式のものである。

立岡山6号墳^⑨（38-1～4） 直径16.5mの円墳で、木棺直葬を内部主体に持つ。無立聞素環鏡板付轡1、半球形辻金具1、鉸具2が出土している。轡（1）はほぼ正円を呈し、円環金具を立聞とする。引手金具の先には別造りの引手壺がつくが、右側引手金具の孔の開く方向が素環側円環と引手壺側円環が直交するため、引手壺も左側とは向きが異なる。半球形辻金具（2）は鉄製で、丸形脚が2ヶ所欠損する。一条の責金具が取り付け。鉸具（3・4）は面繫を構成する部品であろう。

明気1号墳^⑩（39-1） 直径19.5mの円墳で、木棺直葬を内部主体に持つ。方形立聞素環鏡板付轡（1）の立聞は幅の狭いもので、素環部鉄棒の中央につくのではなく、素環鉄棒の背面に揃えて立聞を鍛接している。

石塚谷古墳^⑪（40-1～12） 木棺直葬を内部主体に持ち、銀象嵌大刀を出土したことで知られる。馬具は方形立聞素環鏡板付轡1、鉸具付舌状金具2、半球形辻金具2、半球形雲珠1、木芯鉄板張壺鐙の兵庫鎖一对分と吊金具二対分が出土している。轡（1）は鉄製であるが、立聞につく吊金具・鉸は鉄地金銅張製である。引手金具は銜金具と直接連結する。引手壺は共造り屈曲式であるが、通常、左右の引手壺の屈曲方向は対称となるが、本例では同方向に向く。右側の引手金具の銜金具側円環はもう一方の引手金具の円環と違い、あとから曲げて環状に造ったものである。

半球形辻金具（3・4）・雲珠（5）には脱落しているが半球部頂部に5弁の花形座がつき、宝珠飾で留めていたと思われる。いずれも刻み目を持たない責金具1条が脚部につき、鉸を1ヶ所ずつ打つ。辻金具は半球部・脚部等全て鉄地金銅張製であるが、雲珠は脚部・鉸・責金具とも鉄地金銅張製、半球部のみ鉄製の可能性がある。

鉸具付舌状金具（2）は、面繫の顎革と頂革もしくは頬革につき、革帯の長さを調節する用途の金具である^⑫。

鞍金具は円形座金具に鉸具が取り付けもので、鞍居木に差し込む脚は良好に残存する。座金具の裏には、図の横方向の木目方向の木質と漆が付着する。

壺鐙兵庫鎖（8・9）是一对分が出土しているが、吊金具は二対分存在する。一对は幅の細いもの（9・12）、もう一对は太いもの（8・11）である。壺部に固定する鉸孔は8は両側とも5ヶ所、9では片側で5ヶ所確認できる。また、兵庫鎖是一对分しか存在しないのに吊金具は二対分あることから、吊金具のみ付替えて使用したか、もしくは、兵庫鎖の代替として革帯を使用したもう一对の木芯鉄板張壺鐙を副葬したのかもしれない。鉸具は、外枠先端に直径3mmの孔をあけ、T字状刺金を通す。吊金具の裏側には木質が良好に残存する。

その他、轡・辻金具・雲珠には麻布と思われる繊維がべったりと付着していた。

曾祢崎3号墳（41-1～4） 前稿でも掲載したが、座金具（4）が図化されておらず、実測の上再掲した。

伊勢市神路山出土 元皇學館大学教授の井上頼文教授所蔵遺物の中にある。これらは、大手前女子学園（現大手前学園）に寄贈されたが、井上教授が同学園を退職した際に引き上げたらしく、現在の所在は不明である^⑬。

八代神社蔵（48-1） 八代神社は鳥羽市神島にある。1976～1977年に資料調査が実施され、最近その実測図が公開された^⑭。この轡は、8世紀代に入るかという鑢轡で、鑄造銅製である。

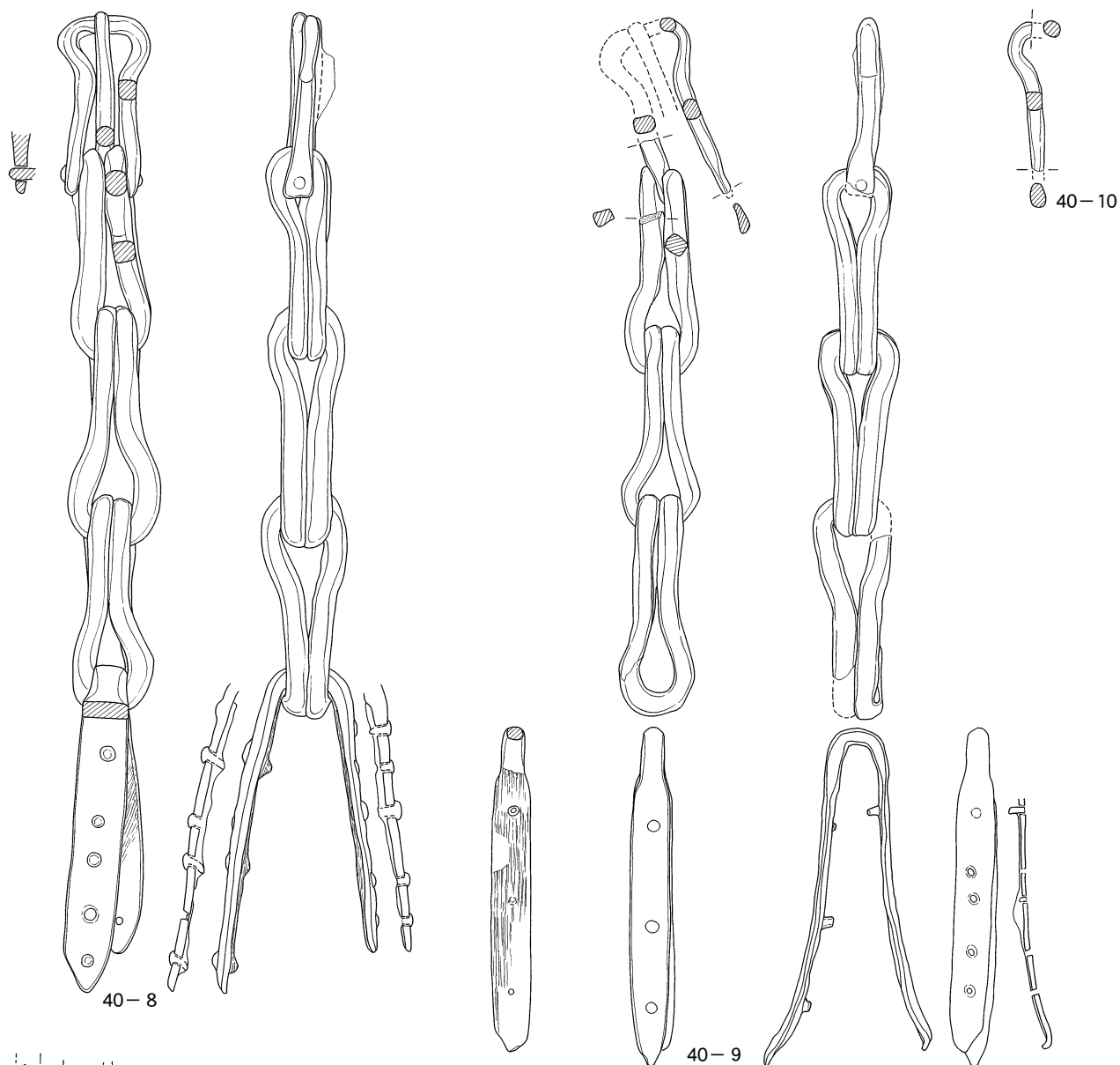
（2）新たに判明した例

大岡寺5号墳 詳細は3号墳と同様である。馬具かどうか不確かであるが半球形雲珠もしくは辻金具脚状の金具がある。爪形の平面形を持ち、1ないし3鉸を打つようである。通常の半球形雲珠・辻金具の脚は一定の厚さであるが、本例は断面形は台形状を呈し、半球部に接する部分が厚い。

大岡寺6号墳（72-1・2） 詳細は3号墳と同様である。鞍金具に座金具はないが本来存在した可能性がある。

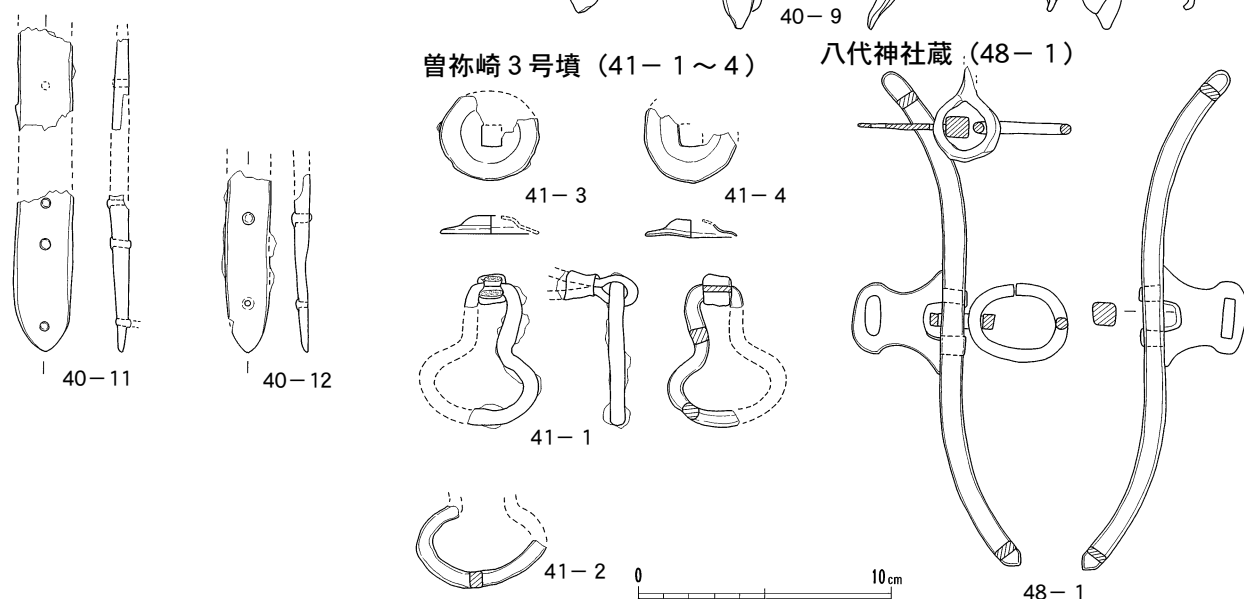
正知浦2号墳（73-1～6） 亀山市椿世町に所在する古墳群で、国道1号亀山バイパス建設に伴う調査で1・2

石塚谷古墳 (40- 8 ~ 12)



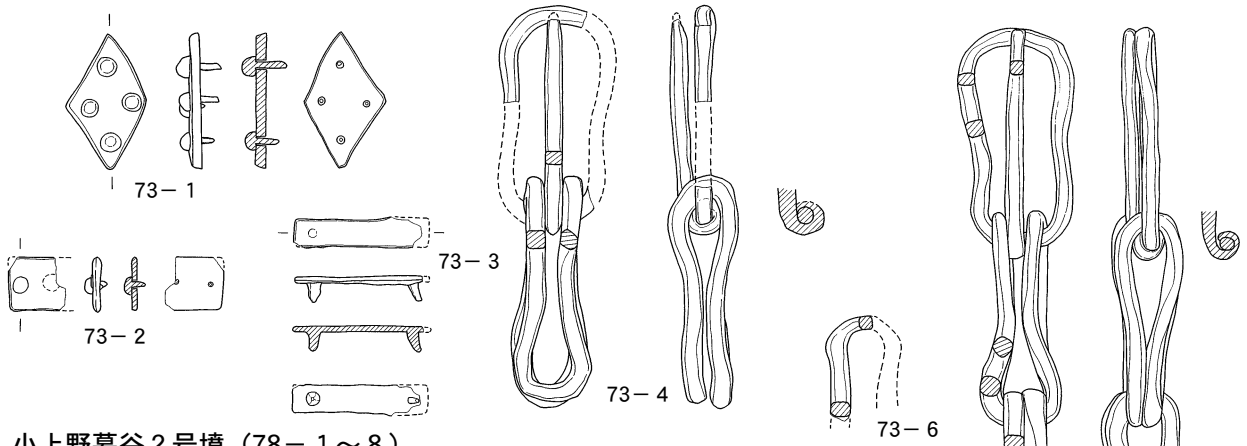
曾祢崎 3 号墳 (41- 1 ~ 4)

八代神社蔵 (48- 1)

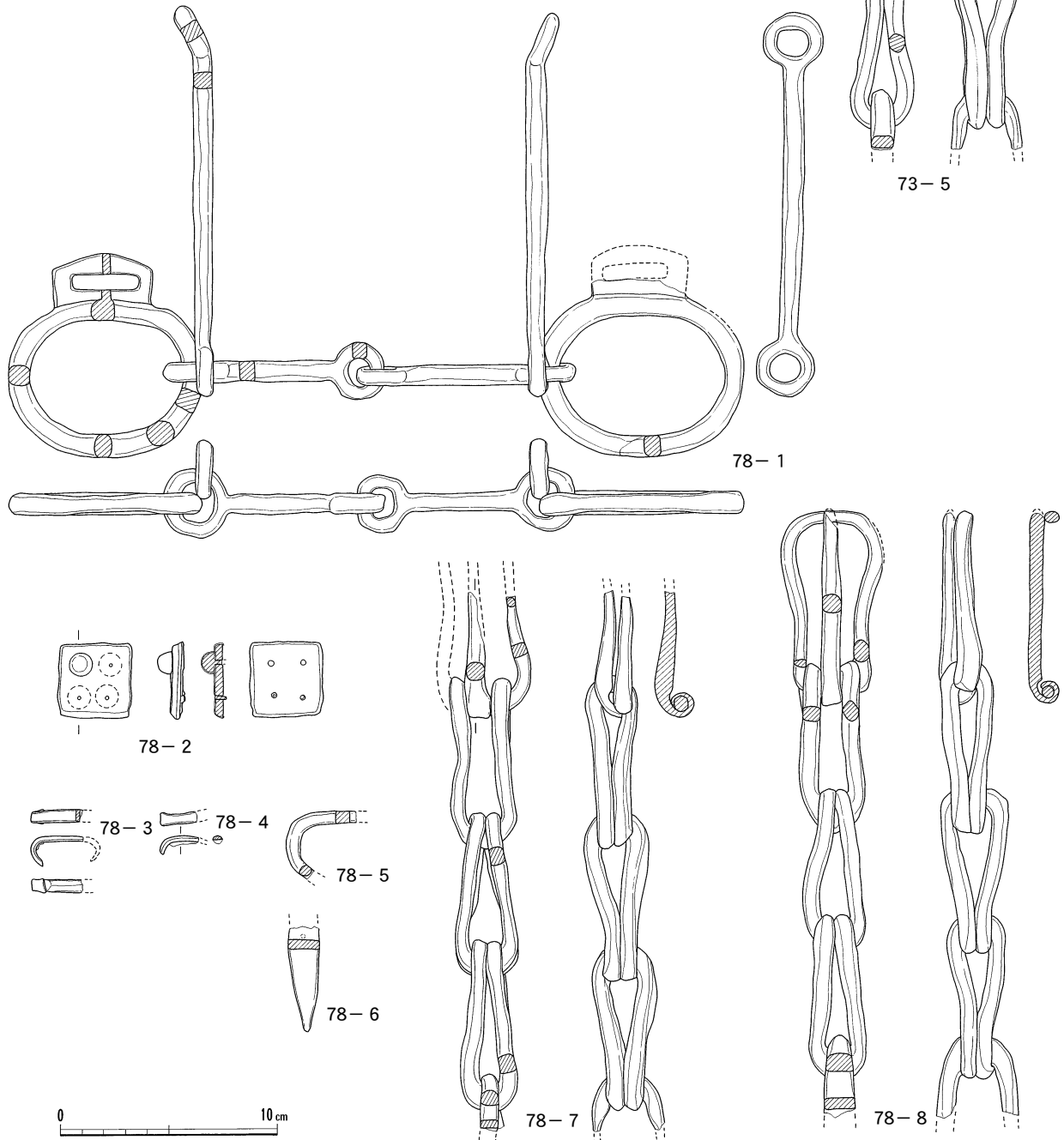


第 4 図 石塚谷古墳(2)、曾祢崎 3 号墳、八代神社蔵 馬具 (S = 1 : 3)

正知浦 2 号墳 (73- 1 ~ 6)



小上野墓谷 2 号墳 (78- 1 ~ 8)



第 5 図 正知浦 2 号墳、小上野墓谷 2 号墳出土馬具 (S = 1 : 3)

号墳が調査された。馬具が出土した2号墳は直径25m程の円墳で、左片袖式横穴式石室を内部主体に持つ。石室内は攪乱を受けているが、馬具は玄室中央の土器集中出土地点から出土した。馬具には、菱形飾金具（1）・方形飾金具（2）・長方形金具（3）・木芯鉄板張壺鐙（4～6）がある。菱形飾金具・方形飾金具・長方形金具いずれも鉄製である。長方形金具は四日市市御池5号墳出土の長方形金具と類似するもので、馬具とすればどこにつくものかは不明である。木芯鉄板張壺鐙は兵庫鎖と鉸具、吊金具の一部が残存するのみであるが、全容の知れる5から、二連の兵庫鎖を持つ形式である。通常は三連であるが、本例の兵庫鎖は他例の鎖が一単位8cm未満であるのに比して8.6～9.2cmと長い。鉸具は、外枠を造り、それに棒状刺金を巻きつける形式である。

「字三月田二於ケル古墳」^⑤ 武器馬具仏像等出土とされるものである。これについて「右仏像ヲ持帰リテ安樂寺ニテ三日間開帳セリ。其時村中大ニ疫病流行スルニヨリ此崇リトシテ元ノ処ニ還シ埋メシと云フ。（後略）」とある。馬具についての詳細については触れられておらず、出土が事実だとしても仏像と同様に埋め戻されたのであろう。

明気4号墳（76-1） 前掲の明気2号墳と同年度に調査されたものである。4号墳は長径30.0m×短径24.0mの楕円形の墳丘をもち、木棺直葬である。馬具は、方形立聞素環鏡板付轡（1）が出土した。この轡は、1号墳の轡と同様、比較的幅の狭い立聞をもち、素環部の中央につくのではなく、素環鉄棒の背面に合わせて立聞を鍛接しているようである。引手壺は共造り屈曲式のものであるが、比較的屈曲の角度が浅い。

塚山3号墳^⑥ 出土記録があるのみで詳細は不明である。

「笠松山発掘品」 明治30年に高等師範学校教授兼帝国博物館御用掛三宅米吉・帝国博物館技手黒川真道が度会郡宇治山田町尾上町西村竜太郎方で、「笠松山発掘品」を見たと言われる。鉄製品の中に轡があったようである^⑦。

小上野墓谷2号墳（78-1～8） 昭和60年度に農道整備事業に伴い発掘調査が行なわれ、直径15m程の円墳1基が調査された。左片袖式横穴式石室を内部主体に持ち馬具は石室床面より出土した。馬具は、方形立聞素環鏡板付轡（1）と鉄地金銅張方形飾金具（2）・責金具（3・4）・鉸具片（5）・木芯鉄板張壺鐙（6～8）である。轡立聞は平面形が山形を呈する。断面形で見ると、素環鉄棒の中央からやや後部分に鍛接される。銜金具と引手金具は直接連結するもので、引手壺は共造り屈曲式である。素環部は、使用のためか下半部の鉄棒が痩せて細くなっている。鉄地金銅張方形飾金具は裏側に金銅板の折り返しが良好に確認できる。鉸も鉄地金銅張である。この飾金具は責金具（3・4）と組み合い、辻金具となる可能性がある。7・8は三連の兵庫鎖に鉸具がつく。鉸具は外枠を造り、棒状刺金を巻きつける形式である。6は鐙吊金具の先端部であろう。

高猿古墳群 明治年間には「金具残片 轡の如きもの若干」、大正元年には、「轡鏡板と杏葉とは鐵地に金銅を張つたものではなくて、鐵に銅を張つて金箔を押したもので、（以下略）」が出土したと言われる^⑧。後者は、帝室博物館（東京国立博物館）に提出されたが、鏡以外は地元に返還され、主に三重県師範学校に保管されたと言われる^⑨。

長田古墳群 伊賀市長田・三軒家に所在したと言われる古墳群である。弁天池の中島（弁天祠が祀られている）において、昭和39年8月に百中魅氏が円頭大刀把頭、鉄製馬具、土師器片・須恵器片を採取した^⑩。

長屋八ツ塚古墳群 名張市長屋（現赤目町相楽）に存在した古墳6基を、昭和30年に畑地とするため開墾した際、轡の他に「須恵器鈴台小壺、土師器手付き盃、蓋坏・蛤貝、鉄刀、鉄鎌、小刀（破片）」が出土したと言われる^⑪。

3 検討

（1）編年

前稿では、それぞれの例について年代を記していなかった。本稿では三重県内出土古墳時代馬具について、大まかな編年作業を試みる。

埴輪等は埋葬にあたって製作され、製作年代と副葬年代との差がさほどない「葬具」であるが、馬具は被葬者の

生前の品が埋葬時に葬具となるという側面があり、共伴する葬具との年代差が各古墳で同一とは限らない。そのため、本稿では馬具自体の各部位の変化に重点を置いて並べている²⁹。

① 轡・板状鏡板付轡

県内で複数見られる形式のf字形鏡板付轡と楕円形鏡板付轡について特に取り上げて見ていく。

f字形鏡板付轡 6例出土している中、詳細の知れるものは4例である。大里西沖遺跡例は鉄製であるが、f字形鏡板付轡では県内で最古例である。残り3例は、まず文様板の形状から見ると、井田川茶臼山古墳例（11-20・21）の文様板の中央円形部と縁金部との間に陸橋が現われる形態のものであるから、f字形鏡板でも後出で、キラ土古墳例より新しいといえる。しかし、薬師谷14号墳例（25-1・2）と比較するとその陸橋の形は薬師谷14号例のほうが明確であること、また、縁金具の鉋数が薬師谷14号例の方が多く密に打つことから3例での前後関係は、キラ土→井田川茶臼山→薬師谷14号となる。キラ土と井田川茶臼山の間はもう1型式あっても良いが、井田川茶臼山と薬師谷14号の間はほとんどないと考えられる。

楕円形鏡板付轡 県内では井田川茶臼山古墳例、小山A-1号墳例、丸尾山古墳例の3例のみである。ここでは、銜金具を鏡板に連結する部分に注目する。小山A-1号例は連結部表側に半球形覆金具を被せ、連結部が外側から見えないような工夫を施している。これは装飾性重視の工夫であり、他府県の例も見るとおおよそTK43型式段階から始まるようである。後の2例の差異は銜連結孔縁金部の鉋の有無である。井田川茶臼山例は鉋は打たないが、丸尾山例は密に鉋を打つ。鉋は時代が新しくなるにつれ密に打つ傾向があることから、井田川茶臼山→丸尾山→小山A-1号となる。

② 轡・連結方法

鏡板の外側で連結していたのを内側で連結するようになるのがTK10型式併行期、井田川茶臼山古墳例からである。外側連結では、大里西沖遺跡とキラ土古墳例は銜先環と遊環を孔の開く方向を直交にして共造りにする。その連結方法からキラ土古墳例はMT15型式併行期から若干遡る可能性があるが、鏡板のf字形の形状から、大里西沖遺跡例とキラ土古墳例の間にはもう一型式あると考えられ、キラ土古墳をMT15型式併行期まで下げた。

また、銜先に取り付けた軸を鏡板裏から刺しこみ可動性を持たせ、鏡板内側で引手金具を連結するのはTK43型式で、県内では富岡前山古墳例のみである。

引手金具と銜金具を遊環を介して連結する方法は、キラ土古墳のような共造り遊環の例を除いては県内ではない。

③ 轡・その他

鏡板を面繫に連結する吊金具は、別造り板状吊金具を用いるのはTK43型式段階までである。それ以降になると、鏡板と一体に造る形式となり、県内では山添3号墳・富岡前山古墳がある。これについては、杏葉でも同様である。

素環鏡板付轡に見られる方形立聞は幅広のものが幅の狭いものよりも先行するようである。また、立聞を鉋具に造るものは、TK209～TK217型式併行期に見られる。

振り引手は県内では富岡前山古墳と河田B2号墳の2例のみであるが、TK43型式段階に現れる。

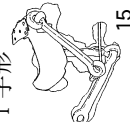
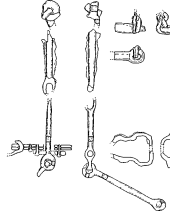
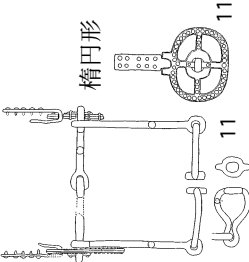
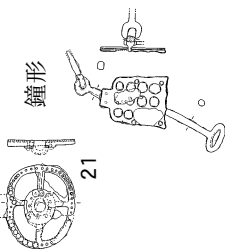
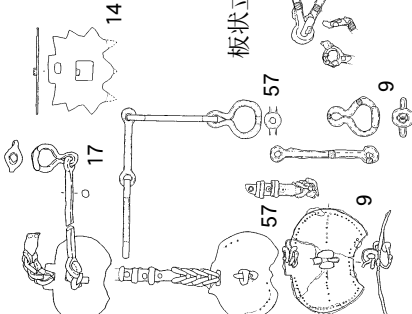
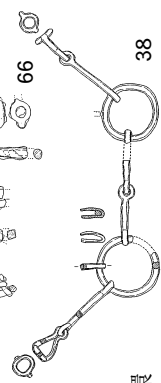
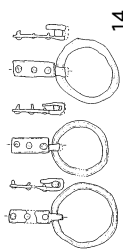
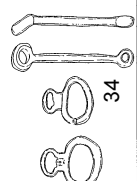
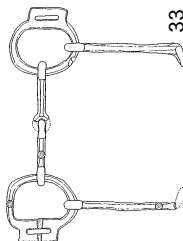
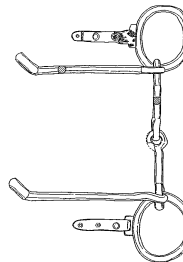
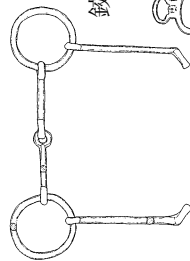
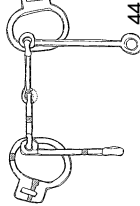
轡全体としては、内湾楕円形鏡板はMT15～TK10型式段階のみに見られ、これらは全て別造りの引手壺を持つ。また、三重県内において素環が盛行するのはTK43型式併行期からである。

④ 雲珠・辻金具

初現期は環状雲珠・辻金具、十字形辻金具のみであるが、TK10型式併行期から半球形雲珠・辻金具が現れる。半球形雲珠・辻金具は半球部の高いものと低いものに分かれるが、その盛行・変遷にはさほど特徴は見られない。

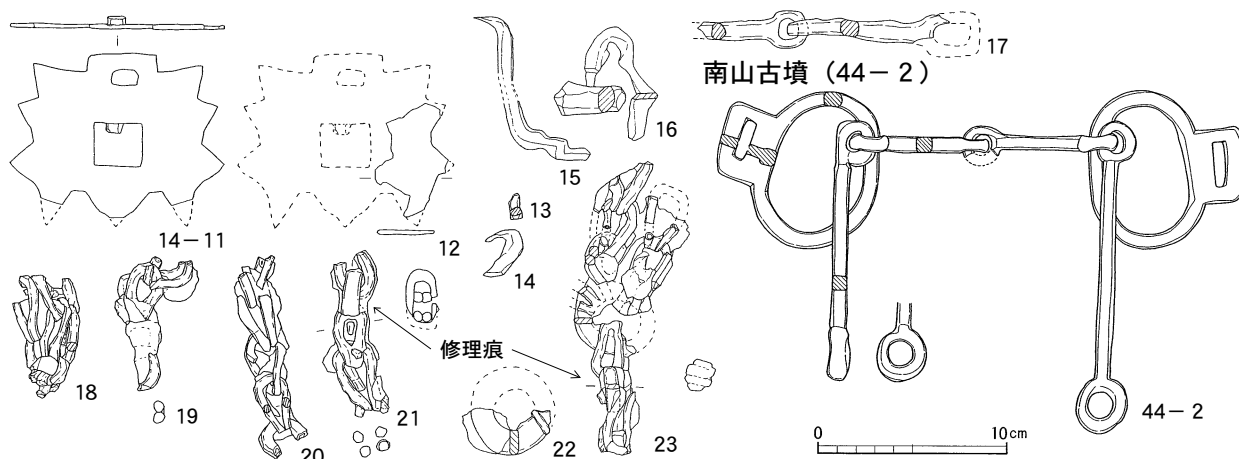
⑤ 鐙

県内例ではTK43～TK209に集中する。井田川茶臼山古墳例の木芯鉄板張壺鐙は、壺部の形状が球形になる

f 字形  15 T K 23 I 47	内湾楕円形  56 M T 15	楕円形  11 T K 10	鐘形  21 T K 43	板状立聞素環 (立聞幅広)  14 T K 209	板状立聞素環 (立聞幅狭)  38 T K 217
				無立聞素環  14	鉸具頭立聞素環  34
					振り引手  33
					40 
					44 
					44 

	杏葉	雲珠	辻金具	鍔	鞍
劍菱形 T K 23 I 47	15	15	15		
M T 15	56	56	14	11	
T K 10	11	11	11	11	11
T K 43	8	8	30	40	8
T K 209	8	8	51	61	41
T K 217	8	8	51	61	41

ツヅミ 2 号墳 (14-11~23)



第 7 図 修理痕の見られる馬具 (S = 1 : 4)

のに対し、TK43型式以降に盛行する壺鐙は円錐形を呈する。その後半の鐙の細部について見ていくと、兵庫鎖鉸具は、石塚谷古墳例では逆U字型の杵にT字型の刺金を噛ますが、他は杵を一体で造り、棒状刺金をその杵に巻き付けている点に違いがある。他、兵庫鎖は大半が3条であるが、一部2条のものもある。時期的な差異はない。

⑥ 鞍 (鞍金具)

鞍金具は、西野5号墳と天理参考館所蔵の鞍金具以外は、鞍金具のみである。その鞍金具を見ていくと、TK10型式段階、井田川茶臼山古墳例・西野5号墳例において刺金を持ち、鉸具の平面形が三角形を呈するものが先行し、TK10型式後半から刺金を持たず、鉸具の平面形が瓢箪形の鞍金具が出現、それ以降の主体となる。鞍座金具は、円形が大半であるが、勝地大坪2号墳例や新井水掛遺跡例のように花卉状の突起を持つものもある。

(2) 使用痕・修理痕を持つ馬具

古墳から出土する馬具は、それが被葬者の生前使用したものであったのか、入手し実際はほとんど使用することなく副葬したのか、もしくは埴輪等と同様、埋葬にあたって用意された葬具であるのか。それを考える一つの手段として馬具自体の使用痕・修理痕がある^②。県内例では、ツヅミ2号墳環状辻金具、南山古墳轡、石塚谷古墳轡・鐙、加和良1号墳轡、鎌切3号墳轡、河田B2号墳轡、小上野墓谷2号墳轡が見られる。

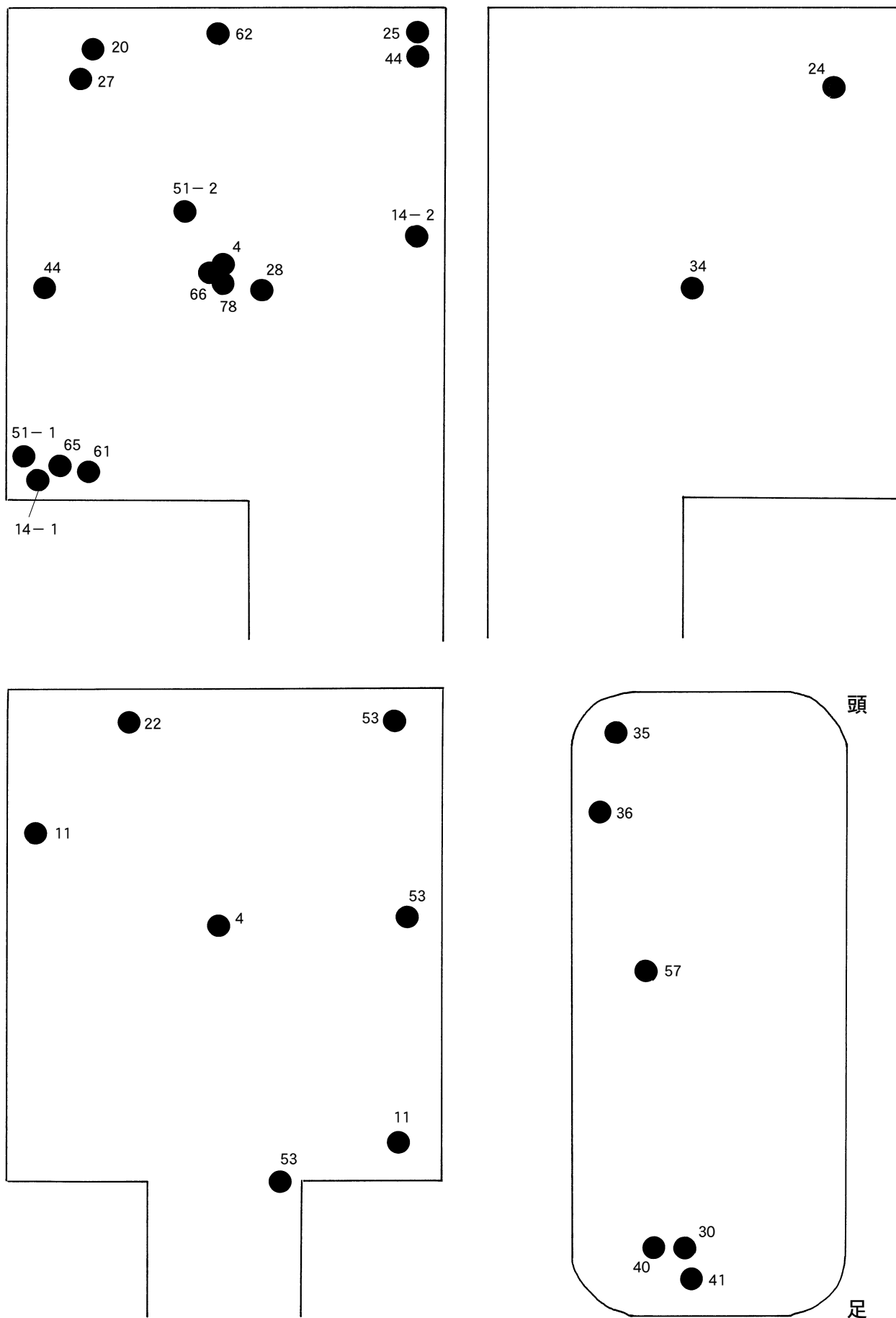
① 使用痕

使用痕のみが見られるのは、加和良1号墳轡、鎌切3号墳轡、河田B2号墳轡、小上野墓谷2号墳轡である。加和良1号墳の銜先輪が連結する連結軸は、鏡板に固定された付近は残存するものの中央付近に向かい擦り切れたような状態で細くなり欠損している。また、鏡板にある孔は、8の字が横を向いたような形状を呈する。もともとからこのような形状をしていたと考えるよりも、使用により銜先環が鏡板と擦り、鏡板が磨り減ったものと思われる。鎌切3号墳に付いても同様に、鏡板の孔がやや8の字が横を向いたような形状を呈する。

河田B2号墳・小上野墓谷2号墳の素環鏡板付轡は、素環の下部の鉄棒が他の箇所比べて細くなっている。これは、実際馬に装着した際、銜金具・引手金具が当たる部分であり、使用により磨耗し、鉄棒がやせたことを表していると思われる。実見できなかった轡の中には、そのような例があるのではないだろうか。

② 修理痕

修理痕がみられるのは、ツヅミ2号墳辻金具、南山古墳轡、石塚谷古墳轡・鐙の4例である。ツヅミ2号墳は、鏡板にとりつく吊金具と、環状辻金具に取り付く革帯が兵庫鎖で、おそらく面繫の革帯の大半が兵庫鎖となるものである。この兵庫鎖の途中で環状金具が見られる部分が2ヶ所ある。これは、破損した兵庫鎖をつなぐための円環



第8図 三重県内出土馬具副葬位置模式図

で、修理して使用し続けたことを表している。南山古墳轡は引手の長さが異なっており、銜と連結される円環部が鉄棒を伸ばして再度環状に曲げて造られている。これについても、使用により最も摩擦により破損しやすい銜と引手の連結部の引手円環部が破損し、再度環状に作り直したのであろう。石塚谷古墳は、轡と鐙に修理痕が見られる。轡は、南山古墳と同様引手の銜と連結する部分の円環が再度環状に曲げて造られている。この轡に特徴的なのが、その修理の際、本来はもう一方の引手と対称になるはずである共造り引手壺の屈曲方向が、同方向につけられてしまっていることである。鐙は、前述したように少なくとも2セット副葬されている。吊金具の幅が細いタイプと太いタイプの2種類であるが、どちらも通有のものと違い鉾の数が多い。本来は3鉾、左右対称の位置に打たれているが、40-9では、吊金具を恐らく再度伸ばして鉾の位置が対象になるように兵庫鎖に取り付ける部分をずらしている。鉾孔は40-8は両側とも5ヶ所、40-9では片側で5ヶ所確認できるが、鉾の脱落した孔は裏に木質が覆い、脚は貫通しておらず鉾の間隔は一定でない。先端の鉾の位置も端過ぎて強度に疑問があり、破損したものを再度別の位置に鉾を打ち直したものと思われる。

(3) 副葬位置

筆者は以前、古墳時代の馬具について横穴式石室内の出土状況を検討したことがある^②。横穴式石室出土の馬具は、棺内に入ることにはないが属人性を持ち、階層性も有することが明らかになった。また、鉄鏃や土器等と同じように横穴式石室を家に見立てて、ある一定の場所（馬具では袖部）に副葬する特徴もある。ここでは、県内出土馬具を横穴式石室・木棺直葬ごとに検討を行う。詳細の知れるものは横穴式石室で26例^③、木棺直葬では6例である。

① 横穴式石室

横穴式石室では、26例中、追葬による片付けや盗掘等の攪乱を受けていないと思われるのは15例である。ただ今回は、攪乱の可能性のある例も全て石室の形態別に出土位置をドットで落とした。

この中で、埋葬の頭部方向が分かるものについて見ると基本的に棺に添わせ、足側に副葬する例が多い^④。また、前回の検討と同様袖部に置かれる例が多い。

② 木棺直葬

木棺直葬では、鏡や玉類、武器武具類は棺内に入れて被葬者に添わせ、盾等は棺外の木棺横に置いて副葬される。前者は、被葬者の持ち物としての副葬と鏡や武器武具類は辟邪の意味を持たせた副葬の2つの意義付けがなされ、後者は鏡と同様辟邪の役割をなしている。詳細の分かる県内木棺直葬出土の馬具は6例と少数である。石塚谷古墳例は被葬者足側に床面から浮いた状態で出土したことから棺上に置いたものと思われる。曾祢崎3号墳は足側の粘土塊外側、副葬品埋納部から出土した。奥小波田1号墳は棺中央部から出土しているが、棺底から高い位置で出土していることから棺上に副葬されたのであろう。これらはいずれも被葬者とは別の空間に副葬されているが、山添2号墳例のみは足側の棺を区切る粘土塊の内側から須臾器群と共伴しており、棺内に副葬されたものと思われる。

検討例が少ないが、横穴式石室の場合と同様、木棺直葬においても棺外に副葬される傾向があるようである。土器や農工具類のように棺小口に別に空間を設けて副葬したり、また棺外でも被葬者上に置かれる。前者は、横穴式石室で袖部に馬具を副葬する例と同じであり、後者はあくまでも属人性を有した副葬と言える。しかし、盾や鏡等のように辟邪の意味合いを持たせるものでもないようである。ちなみに、石塚谷古墳出土例は、轡・雲珠・辻金具等に麻と思われる布が付着しており、副葬する際には袋に入れたものと思われる。

(4) 保有形態

馬具は、面繫、胸繫^⑤、尻繫、鞍、鐙に伴う馬具を副葬するものもあれば、ごく一部のみ副葬する場合がある。言うまでもないが、馬具は金属部のみで構成されるのではなく、木質部・皮革部・布部・金属部で構成されるものである。よって、木質部・皮革部・布部のような有機質部分は腐蝕により残されることはほとんどなく、残存する

金属部分から馬具の全体像を想像するしかないのである。鞍・鐙等は六大A遺跡例にあるように、木質部分のみでも十分成り立つことから、古墳等から鞍・鐙が出土しないからといってそれらが副葬されていないと言うことはできない。このような点を考慮しても、馬具の一部のみを副葬する例がある。これは、どう考えればいいであろうか。

一部のみ副葬・面繫のみ これについては、16例と多い。面繫を構成する馬具さえ揃っていれば、乗馬は可能といえるからである。その詳細を見ると、鉄製内湾楕円形鏡板付轡のセット、素環鏡板付轡がほとんどであるが、薬師谷14号墳・塚山古墳群・丸尾山古墳例は鉄地金銅張鏡板付轡のセットである。塚山古墳群は伝世品であり、丸尾山古墳は細片となっているので他に馬具がある可能性がある。攪乱のないのは薬師谷14号墳例のみである。薬師谷14号墳からは、鉄地金銅張f字形鏡板付轡と組合式辻金具、鉸具が出土している。

一部のみ副葬・尻繫のみ 尻繫を構成する馬具は雲珠・杏葉等で、県内では天保1号墳例のみである。天保1号墳は全体的に攪乱を受けているが、剣菱形杏葉3、半球形雲珠1、杏仁形鉸等が玄室中央からまとまって出土している。面繫馬具も副葬されていたとしても、破片がなく、その可能性は低いと考える。

一部のみ副葬・鞍のみ 鞍を構成する馬具は、前輪・後輪・鞍金具である。御池5号墳、薬師谷7号墳、曾祢崎3号墳、上山9号墳がある。いずれも、盗掘等の影響の可能性があるのでここでは検討対象から除外する。ただし薬師谷7号墳は、石室内から鞍金具が、周溝から供献土器と共に素環鏡板付轡が出土しており、本来セット関係にあった馬具を分けて副葬・供献したと言えるかもしれない。

フルセットの副葬 ここでいう「フルセット」とは、面繫、尻繫、鞍、鐙等が見られる例について判断している。県内の例では、井田川茶臼山古墳と西野5号墳がそれにあたる。ただ、石塚谷古墳は杏葉は出土していないが雲珠があるため、尻繫部が副葬されたと言えることからフルセットの副葬と考える。富岡前山古墳も盗掘を受けているが、鞍部以外は揃っているため、当初からフルセットであったと思われる。

井田川茶臼山古墳には大きく分けて2セットの馬具が副葬されているが、そのうち報告書で言うところのV・VI群の馬具は面繫の馬具（f字形鏡板付轡と辻金具類）、鞍に伴う鞍金具、木芯鉄板張壺鐙、尻繫の馬具（剣菱形杏葉と環状雲珠、辻金具）、また胸繫に取り付けたであろう馬鈴1がある。その時期はTK10型式併行期の所産である。

西野5号墳では直径20.0mの円墳と思われる古墳で両袖式横穴式石室を内部主体に持つ。石室内は攪乱を受けているが馬具は奥壁の方から出土している。出土馬具^⑧は細片が多いが、轡類（1～3）、辻金具類（4～7）、杏葉類（8～10）、半球形雲珠（11）、鐙類（12～19）、鞍金具類（23～30）、鉸具片（20～22）である。2はf字形鏡板縁金具片、1は銜あるいは引手金具片である。8～10は剣菱形杏葉である。報告書でも指摘されているように、9の縁金具から楕円形、剣菱形、心葉形、鐘形の可能性があるが、報告書ではとりあえず楕円形として復元されている。時期的なものや他例から見てf字形鏡板と組み合う杏葉としては、楕円形、剣菱形があるが、楕円形は例は少ない。そのため、10が剣菱部であるところでは判断した^⑨。

石塚谷古墳は、素環鏡板付轡、鉸具付舌状金具、半球形雲珠、半球形辻金具、鞍金具、鐙が出土している。

（5）鈴鹿川と雲出川ー伊勢野氏の検討をヒントにー

伊勢野氏は、県内出土馬具を集成された際、伊勢地域における鈴鹿川と雲出川の優位性について述べている^⑩。10年以上前の指摘であるが、これは現在も色褪せることない明確な指摘である。この点を、前項で見た馬具の保有状況を元に再検討してみたい。

① フルセット馬具の保有

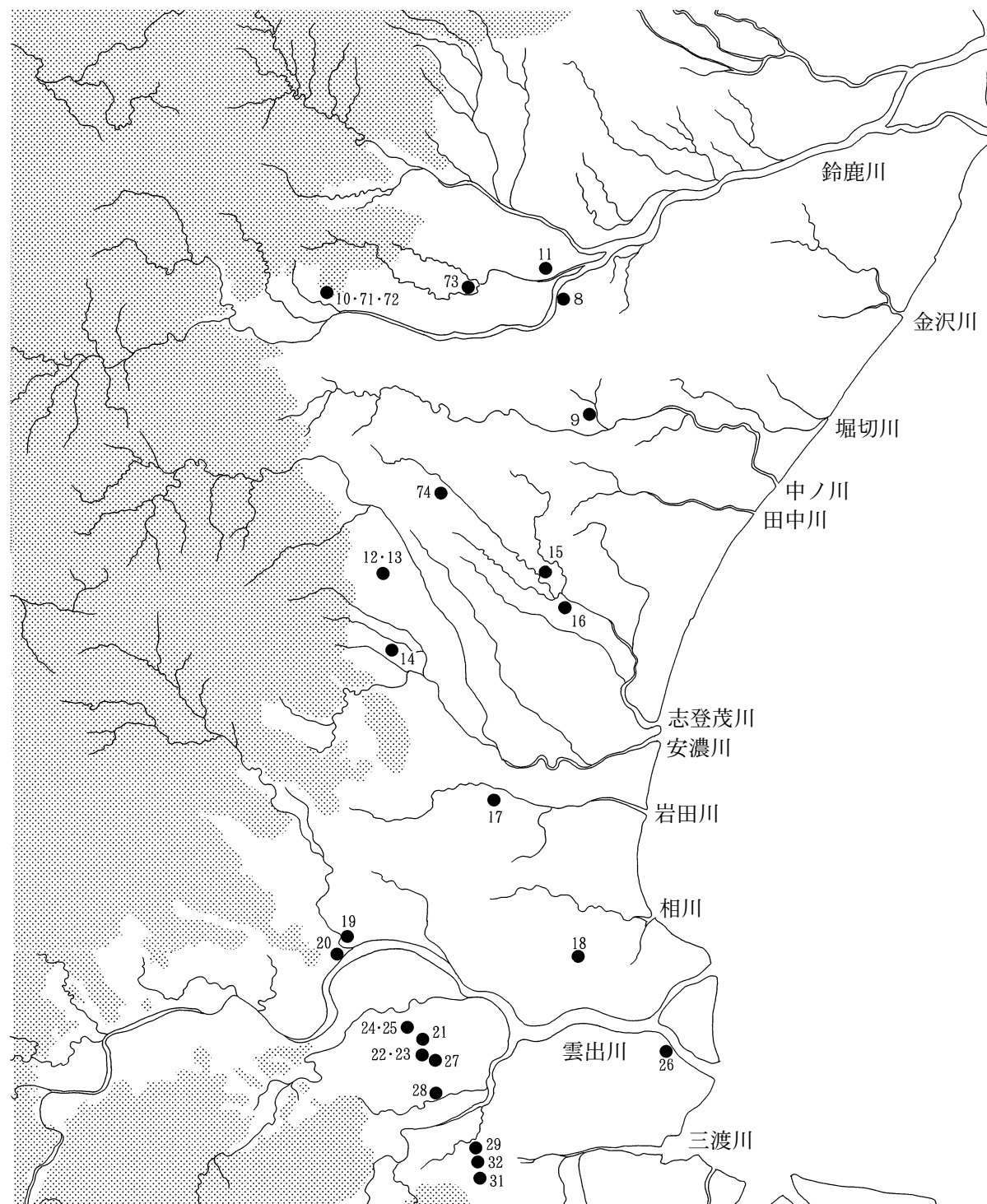
伊勢野氏は、井田川茶臼山古墳に見られる2セットの馬具の副葬と西野5号墳のフルセット馬具の副葬から、立地する鈴鹿川と雲出川の優位性について触れた。両例とも検討したようにほぼ同時期と言っていい段階の馬具である。それぞれ、冠片や筒金具など金銅製飾金具を持つこと等から、当該時期における両河川の盟主的な古墳である

と考えられ、フルセットの馬具を入手し得る地位にあったと言えるのではないか。

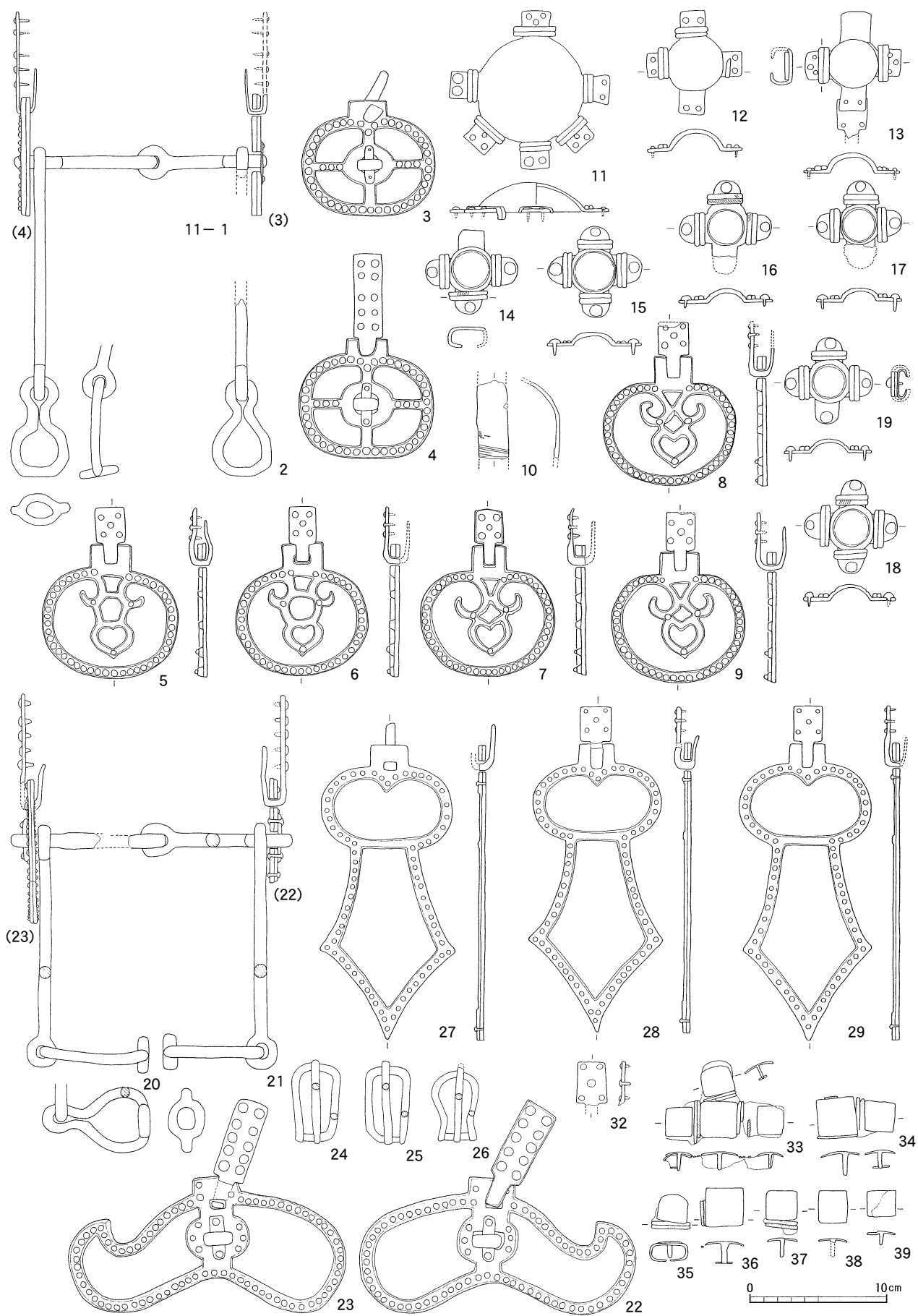
② 天保1号墳・薬師谷14号墳と井田川茶臼山古墳

雲出川流域出土馬具について、若干の検討を加えたい。雲出川流域でも右岸は古墳群の集中地域ということもあり、馬具出土遺跡が比較的集中する。その中でも、フルセット馬具を保有する西野5号墳については既に見たが、その他天保1号墳と薬師谷14号墳に注目してみたい。

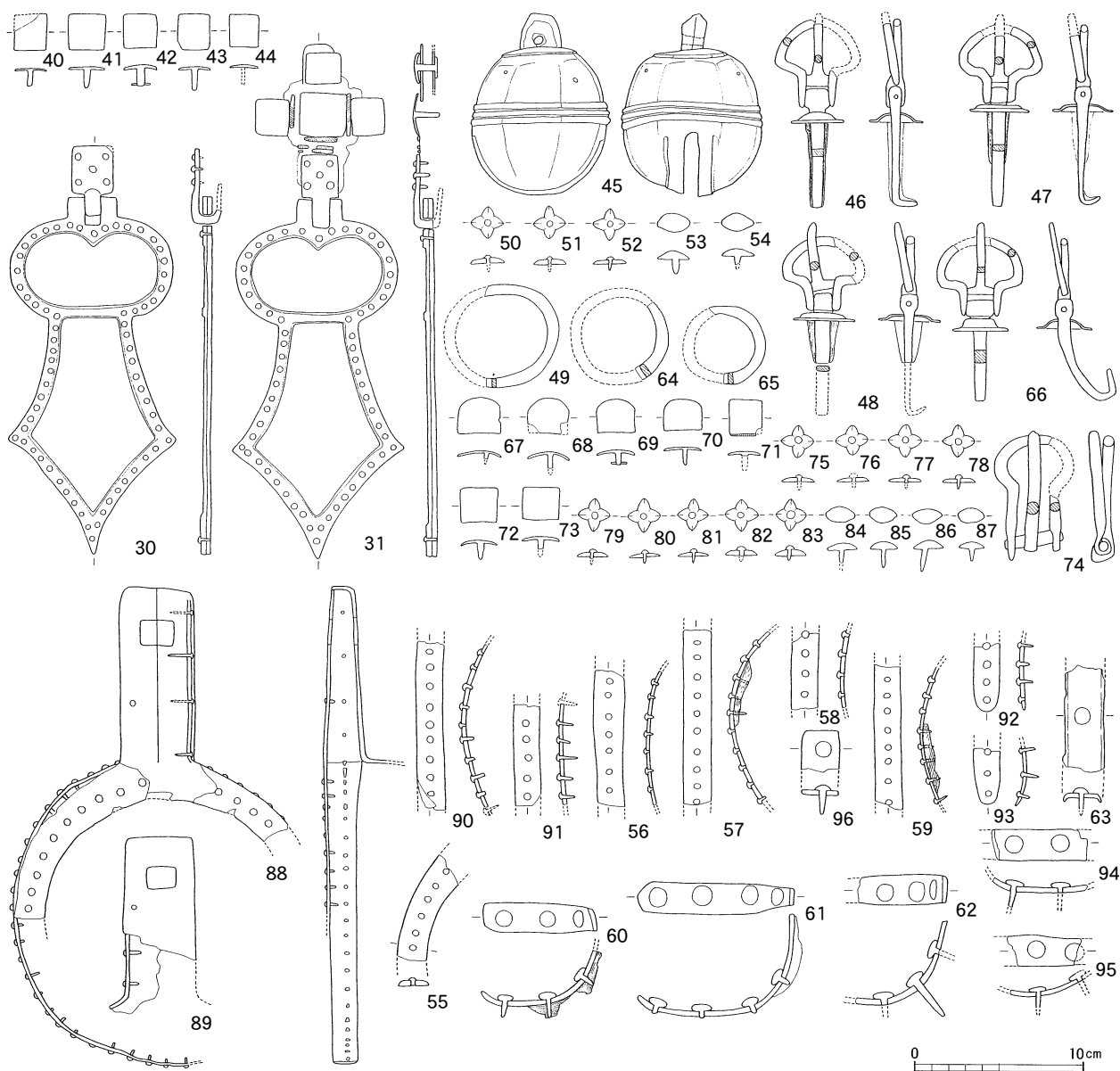
天保1号墳は、松阪市嬉野島田町に位置する古墳である。近畿自動車道建設に伴って発掘調査が行なわれた、9基の古墳群である。1号墳は直径約15.0mの円墳で、左片袖式横穴式石室を内部主体に持つ。馬具は、剣菱形杏葉



第9図 三重北中勢地区馬具出土遺跡分布図（1：200,000）



第10図 井田川茶臼山古墳出土馬具(1) (S = 1 : 4)



第11図 井田川茶臼山古墳出土馬具(2) (S = 1 : 4)

3 (1~4)、半球形辻金具? (6)、半球形雲珠1 (5)、辻金具もしくは雲珠責金具 (7~10)、鉸具5片 (11~15)、留金具2 (16・17)、杏仁形飾鉤10 (18~27) である。剣菱形杏葉の楕円部の縁金具は心葉形を呈し、下部との境には陸橋を持つ。鉤についても密に打つもので、三重県内では亀山市井田川茶臼山古墳出土の剣菱形杏葉とほぼ同一のものである。また杏仁形飾鉤についても同じものが井田川茶臼山古墳から出土していることなど、その類似性が伺える。半球形雲珠は、半球部と脚部を共造りにし、皮革との連結は鉤を打ち責金具で留める。類似する雲珠には若干半球部の断面形が異なるが井田川茶臼山古墳出土Ⅲ群のものがある。

薬師谷14号墳は、14基からなる古墳群である。14号墳は、不整形であるが直径14.0m程の円墳で左片袖式横穴式石室を主体部に持つ。古墳群は位置する尾根の先端に立地する。この14号墳は薬師谷古墳群の造営の契機となる古墳である。馬具は石室内からf字形鏡板付轡と辻金具、鉸具、飾鉤が出土している。盗掘等は受けていない。馬具は石室右側壁の奥壁寄りから出土している。このf字形鏡板付轡は、既に検討を加えたように、井田川茶臼山古墳例に比して若干後出の要素を呈する。辻金具は方形金具に半円形金具を組み合わせ、各々の金具間には縄目刻みを持つ2条の責金具を配し皮革と留める。これについては井田川茶臼山古墳例の馬具と同様である。

③ 保有状況の再検討

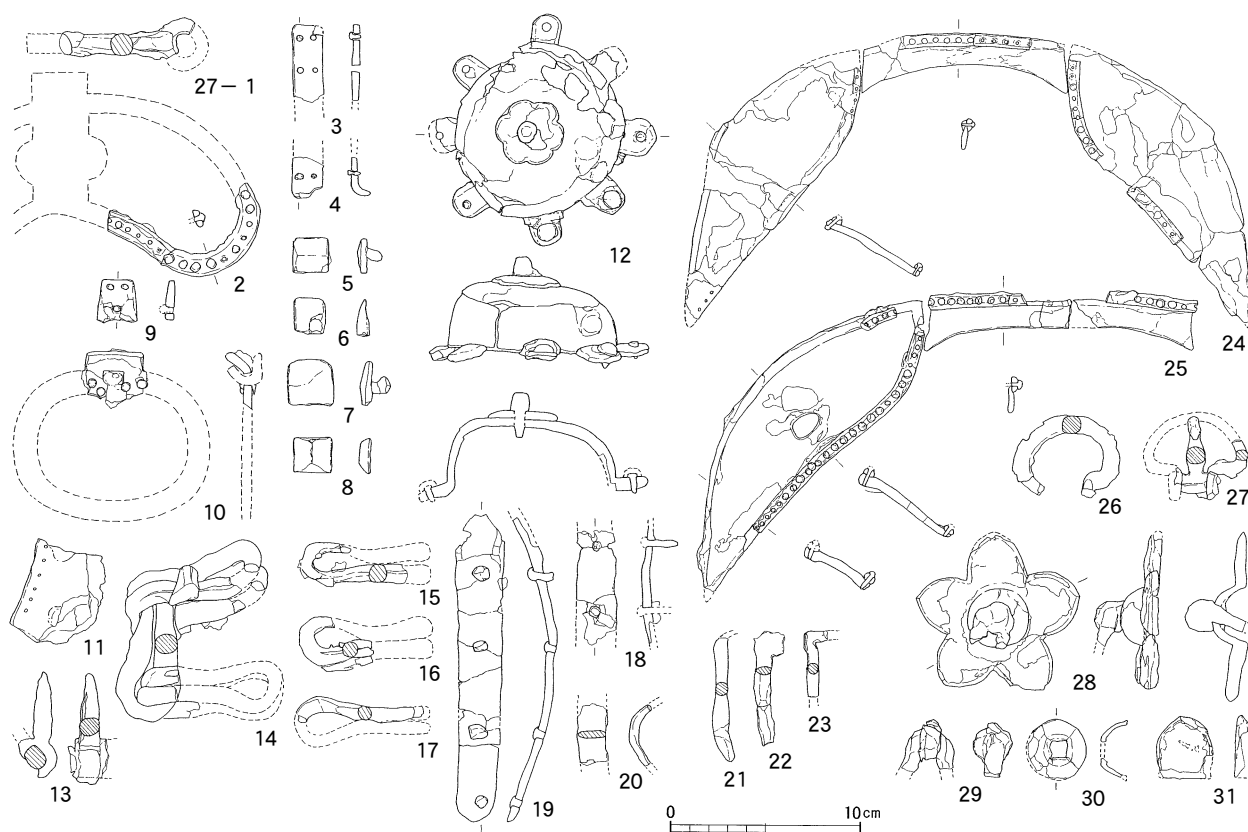
両例について、薬師谷14号墳は面繫に伴う馬具のみが出土しており、天保1号墳は尻繫に伴う馬具のみが出土している。その時期は、類似する井田川茶臼山古墳出土馬具と比較すると、f字形鏡板付轡が薬師谷14号墳例の方が若干後出であるが、他の馬具から見てもほぼ同一段階に副葬される馬具といい。天保1号墳においては石室の破壊もあり断言は出来ないが尻繫に伴う馬具のみが副葬された可能性があり、薬師谷14号墳例については間違いなく面繫に伴う馬具のみが副葬されたといえる。もちろん、腐蝕の可能性がある有機質のみで全て造られた鞍と鐙がある可能性はあるが、それでも尻繫に伴う馬具はなかったことは断言できる。

f字形鏡板付轡は、同じ雲出川流域の西野5号墳がそうであるように、剣菱形杏葉とともに明確なセット関係にあることが指摘されており、副葬古墳についても他の古墳に比してより優位性を持つことが言われている²⁸。そこで、一つの仮説を立ててみたい。

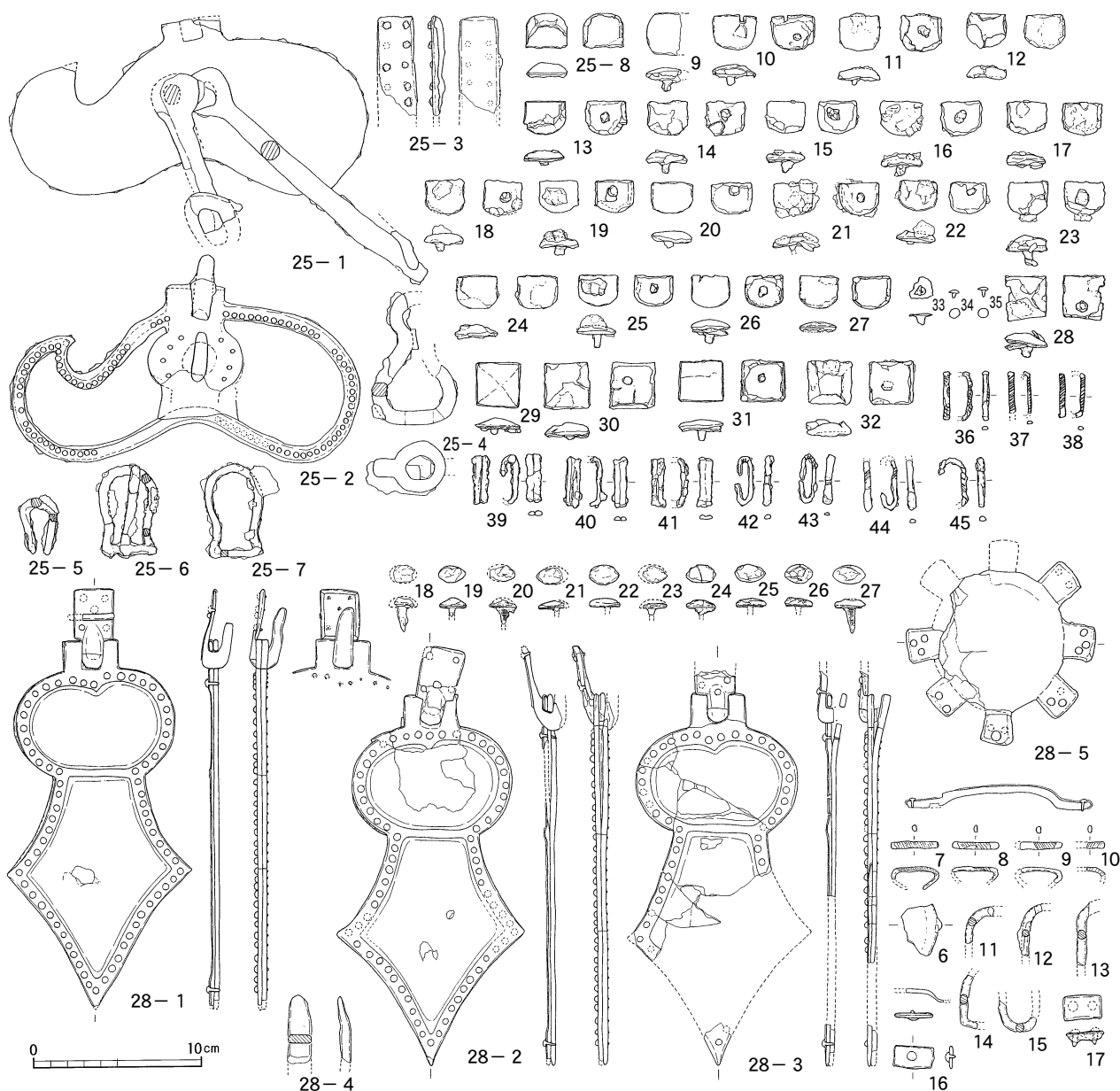
④ 馬具の分配

f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉は、セットで出土することの多い馬具である。セット関係の強い馬具がこの2例のように単独で出土する意味は何であろうか。乱暴な推測を承知で仮説を立てると、馬具が、完全なセットとしてこの地域にもたらされ、その馬具を入手した雲出川地域の「首長」が自身の流域支配の道具として利用したとは言えないだろうか。すなわち、f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉のセット馬具を入手した雲出川流域の首長が、f字形鏡板付轡をもつ面繫部分を薬師谷古墳群集団に、剣菱形杏葉を含む尻繫部分を天保古墳群集団に、自身の地域内の支配権強化のために再分配したということである。もちろん、薬師谷古墳群は古墳群が立地する周辺地域の小地域の権力者であろうし、天保古墳群についても同様の状況であろう²⁹。

このような状況がうかがえる雲出川流域は馬具文化という意味では他地域に比べて優位にあるといえる。鈴鹿川



第12図 西野5号墳出土馬具 (S=1:4)



第13図 薬師谷14号墳、天保1号墳出土馬具（S=1：4）

流域は残念ながら出土例も少なく、検討を加えることはできない。鈴鹿川流域の首長は2セットの馬具を保有するという意味では雲出川流域と遜色はないが、ここで言えることは、雲出川流域ではf字形鏡板付轡のセット馬具を2セット持ち、鈴鹿川流域でもf字形鏡板付轡のセット馬具1セットと、またそれとほぼ同時期である楕円形鏡板付轡のセット馬具1セットを持つということである。この意味でも、両流域の優位性がうかがえるのである。

4 おわりに

三重県内で出土した馬具の集成を受けて、三重県内出土馬具を取り巻く状況について触れてきた。今回触れなかった伊賀地域においても、例えば服部川流域の大山田盆地、上野盆地内の木津川流域、名張川流域など馬具出土古墳が集中する。この地域の馬具は不時発見が多く、検討を加えることが難しい。伊賀地域は畿内からの影響が強い地域であり、畿内との関連という観点で検討を加える必要があると考える。

また、今回は馬具自体の要素、古墳から出土する馬具という観点到偏った。しかし、三重県内出土の馬具には、

「副葬品」としての側面の他に「生業」に絡む問題もある。これについては別稿を成すこととしたい。

馬具という、古墳の一副葬品のみを取り上げたため、三重における古墳文化のごく一部を明らかにするに留まった。しかし、他のあらゆる視点からの検討が加えられることにより、今回の内容が修正され、もしくは補強されることもあると思う。今後、大方の批判を賜りたいと考える。

本稿を成すにあたり、藤井直正・斉藤理・宇佐見重紀・歌納木実生・大川操の諸氏には、資料の実見等にご配慮いただき、さまざまなご教示をいただいた。文末ではありますがご芳名を記して謝意を表します。

〔参考文献〕

第1表にある各遺跡の報告書類は、本稿で再度検討した事例以外は掲載していない。文献40を参照していただきたい。以下、本稿で参考にした文献は以下のとおりである。

- 1 伊勢野久好「第4章遺構・遺物のまとめ 3古墳時代」(『天花寺山』一志町埋蔵文化財調査報告12・嬉野町埋蔵文化財調査報告7 一志町・嬉野町遺跡調査会 1991)
- 2 伊勢野久好「第3章調査の成果 1.西野古墳群の調査」(『天花寺山』一志町埋蔵文化財調査報告12・嬉野町埋蔵文化財調査報告7 一志町・嬉野町遺跡調査会 1991)
- 3 伊勢野久好『ヒジリ谷・葉師谷古墳群発掘調査報告』一志町教育委員会 2004
- 4 岩中淳之他『南山古墳発掘調査報告』伊勢市教育委員会 1982
- 5 岩中淳之「付篇Ⅱ ～東京国立博物館所蔵～伊勢市関係遺物の紹介」(岩中淳之『伊勢市文化財調査報告5 隠岡遺跡発掘調査報告』伊勢市教育委員会 1987) 註記より
- 6 大西源一「伊賀の遺跡遺物(六)」(『考古学雑誌』第貳巻第九號)1895)、「伊賀高猿發掘品の一二」(『考古学雑誌』第七巻第九號 考古學會 1917)
- 7 小野山節「馬具と乗馬の風習」(小林行雄編『日本考古学大系』第3巻 日本Ⅲ 古墳時代 平凡社 1959)
- 8 春日井恒『四日市市遺跡調査会文化財調査報告書X 御池古墳群 ―造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』四日市市遺跡調査会 1993
- 9 金子裕之「鳥羽八代神社の神宝」(『奈良文化財研究所紀要』独立行政法人奈良文化財研究所 2004)
- 10 金子裕之「鳥羽八代神社の神宝2」(『奈良文化財研究所紀要』独立行政法人奈良文化財研究所 2005)
- 11 鹿野吉則「大和における馬具の様相―鉄製楕円形鏡板付轡を中心に―」(森浩一編『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1987)
- 12 栗林誠治「馬具の修理痕」(『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』第3号 財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1999)
- 13 小久保栄一「神島の神宝」(『郷土志摩』No.44 神島特集号 志摩郷土会 1973)
- 14 小玉道明「Ⅲ 御池5号墳の調査」(小玉道明・早川裕己『四日市市埋蔵文化財調査報告8 四日市の後期古墳』四日市市教育委員会 1973)
- 15 小玉道明『三重県埋蔵文化財調査報告26 井田川茶臼山古墳』三重県教育委員会 1988
- 16 小玉道明「三重の考古学年表稿 近代2」(『三重の古文化』第90号(通巻131号) 三重郷土会 2005)
- 17 斉藤理『新井水掛遺跡発掘調査報告』桑名市教育委員会 2005
- 18 下村登良男「Ⅳ 結語」(下村『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会 1986)
- 19 下村登良男「曾祢崎古墳群」(『明和町史 史料編第一巻 ―自然・考古―』明和町 2004)
- 20 鈴木敏雄『三重県河芸郡高野尾村考古誌考』
- 21 杉本宏『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会 1991
- 22 高野尾小学校百年祭実行委員会編『高野尾の百年』1976
- 23 多気町史編纂委員会「第二編原始 第五章 古墳時代 第三節 後期の古墳 立岡山古墳群」(多気町史編纂委員会編『多気町史』通史 多気町 1992)
- 24 多気町史編纂委員会「第二編原始 第五章 古墳時代 第三節 後期の古墳 石塚谷古墳」(多気町史編纂委員会編『多気町史』通史 多気町 1992)
- 25 多気町史編纂委員会「第二編原始 第五章 古墳時代 第三節 後期の古墳 明気古墳群」(多気町史編纂委員会編『多気町史』通史 多気町 1992)
- 26 田中秀和・奥山由紀『安濃町埋蔵文化財調査報告13 西相野遺跡・ツヅミ遺跡発掘調査報告書』安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会 1999
- 27 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 28 津市教育委員会「稲葉・鎌切古墳群」(『三重県埋蔵文化財年報』昭和58年度 三重県教育委員会 1983)。現在整理中。
- 29 西村美幸・前川嘉宏『曾祢崎遺跡(第2次)・曾祢崎古墳群』三重県埋蔵文化財センター 1997
- 30 早瀬保太郎「第二節 古墳時代 二、伊賀の古墳」(『伊賀史概説』上巻 1973)
- 31 保坂三郎・神尾明正・西村強三「10.伊勢の考古学的遺跡 四.神島」(『神宮を中心とする文化財―文化財集中地区特別総合調査報告

第1集-』文化財保護委員会 1962)

- 32 前川嘉宏・野田修久他『近畿自動車道(久居～勢和線)埋蔵文化財発掘調査報告-第3分冊3- 天保古墳群』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- 33 三重県教育委員会「小上野墓谷遺跡」(『三重県埋蔵文化財年報16 昭和60年度』三重県教育委員会 1986)
- 34 三重県教育委員会『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要IV 正知浦遺跡・堀越遺跡第一次調査』 1988
- 35 三重県埋蔵文化財センター『鈴鹿市中ノ川流域の考古資料』三重県埋蔵文化財センター 2006
- 36 三宅米吉・黒川真道「三重紀行の内」(『考古学会雑誌』第2巻第3号 考古学会雑誌編集部 1898)
- 37 宮代栄一「古墳時代の面繫構造の復元」(『HOMINIDS』第1号 CRA 1997)
- 38 明和町史編集委員会「名所・旧跡」(明和町史編集委員会編『明和町史』明和町 1972)
- 39 山中由紀子「横穴式石室出土馬具の基礎研究」(『立命館大学考古学論集I』立命館大学考古学論叢刊行会 1997)
- 40 山中由紀子「資料紹介・三重県内出土の古墳時代馬具集成」(『三重県史研究』第20号 三重県生活部 2005)
- 41 四日市市教育委員会『四日市市下海老町 御池第5号墳発掘調査概要』四日市市教育委員会 1965

[註釈]

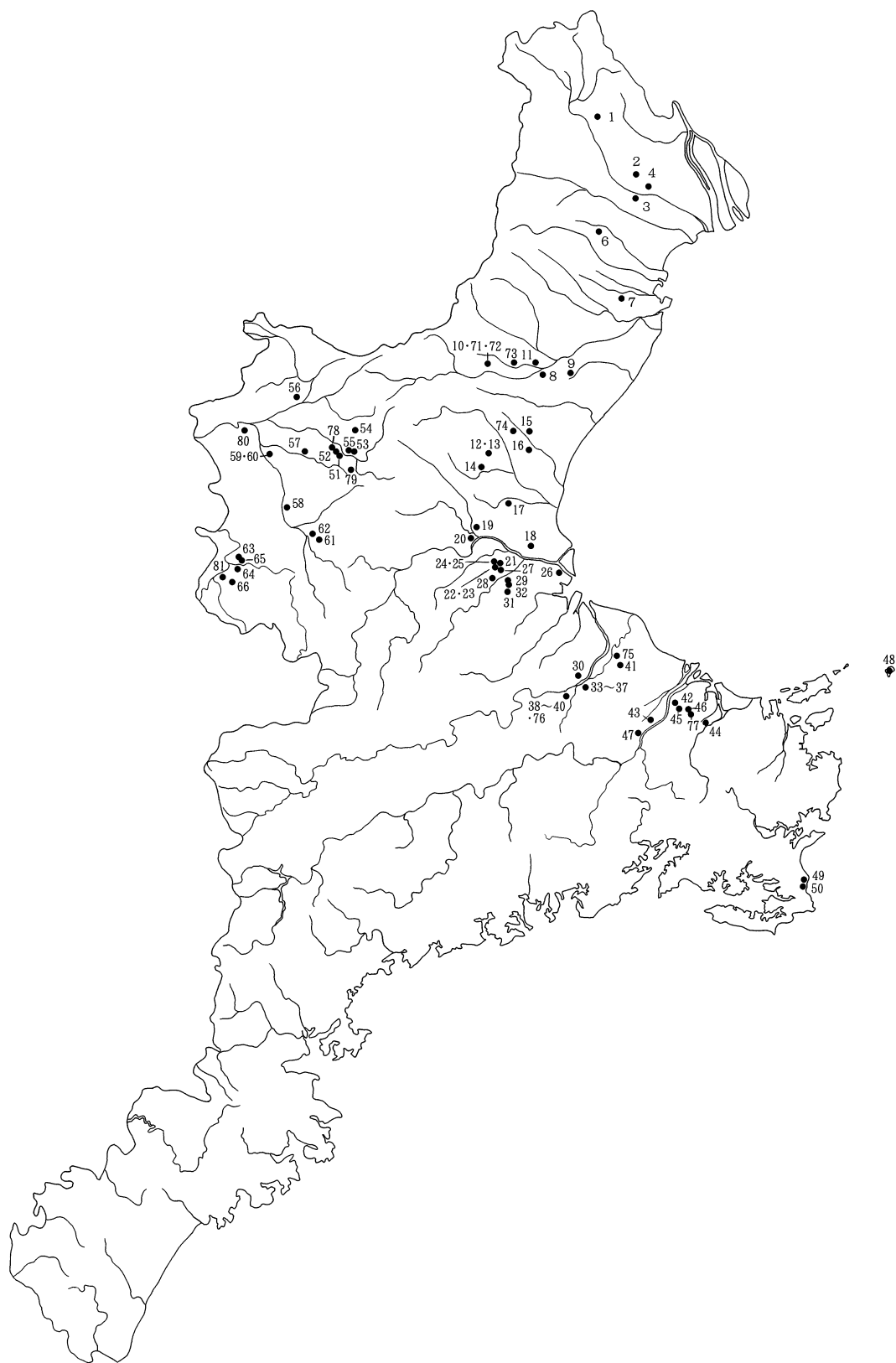
- ① 参考文献40参照。これを本稿では「前稿」と称する。
- ② 番号については、第1表にある「遺跡番号」-「個々の馬具番号」と表現している。
- ③ 文献40でもそうであるが、本稿では、石室の袖部の呼称については埋葬・副葬行為を重視する立場から玄室から奥に向かって右・左と呼ぶ。
- ④ 参考文献17参照。本稿に掲載した実測図は、桑名市教育委員会にて筆者実見のうえ、再実測したものである。
- ⑤ 多気町教育委員会で実見の上、再実測したものである。
- ⑥ 前掲註⑤に同じ。
- ⑦ どちらも刺金が外れた状態で保存処理されたが、実見した際刺金は所在不明となっていた。
- ⑧ 前掲註⑤に同じ。
- ⑨ 前掲註⑤に同じ。
- ⑩ 前掲註⑤に同じ。
- ⑪ 前掲註⑤に同じ。
- ⑫ 参考文献37参照。
- ⑬ 大手前大学名誉教授藤井直正先生のご教示による。
- ⑭ 文献9、10参照。
- ⑮ 参考文献20参照。
- ⑯ 参考文献38参照。
- ⑰ 参考文献16・36参照。
- ⑱ 参考文献6参照。
- ⑲ 参考文献30参照。
- ⑳ 参考文献30参照。
- ㉑ 参考文献30参照。
- ㉒ 参考文献27参照。馬具年代の指標として須恵器の型式名を表記しており、必ずしも古墳の年代と合うとは限らない。
- ㉓ 参考文献12参照。
- ㉔ 参考文献39参照。
- ㉕ 同一古墳内で複数セット出土している場合、各セット毎それぞれ1としてカウントした。また、無袖式横穴式石室については、今回は検討から除外している。
- ㉖ 頭位置については、報告書で記述されている場合、その記述に拠った。記述されていない場合は、遺物出土状況から筆者が判断した。
- ㉗ 胸繫については、小野山節氏の研究から分けられているものであるが、胸繫を構成する馬具には杏葉や馬鈴・環鈴等がある(馬形埴輪等の表現から)。しかし、出土した杏葉は尻繫につくものと分けることが出来ないし馬鈴についても例は少なく、環鈴は甲冑に伴うという指摘もされている(参考文献21参照)。よって、ここでは、胸繫については検討せず、馬鈴・環鈴がなくともフルセットの馬具と考えている。
- ㉘ 出土馬具の各部位の判断については報告書の記述とは違うものがある。これは、筆者実見の上、判断したものである。
- ㉙ 報告書では10の金具について剣菱形杏葉の金具としての可能性に触れながら、敢えて不明鉄製品とされた。
- ㉚ 参考文献1、193～195ページ参照。
- ㉛ 参考文献7参照。
- ㉜ 今回は、きわめてセット関係の強い馬具であるので注目することができたが、このような状況が他地域にも見られるかどうか、類例を検索して再検討していきたいと考える。

第1表 三重県内出土馬具一覧

番号	遺跡名	所在地	出土遺構		埴土・盗掘の有無	馬具出土位置	面聚		鞍	鎧	厩聚		その他	備考
			墳形	主体部			槽	辻金具			雲珠	杏葉		
1	其原二子塚古墳	いなべ市北勢町阿下喜字其原	不明	石室			素環？	辻金具						旧員弁郡山郷村其原字上垣内
2	字アリナガ前方後円墳	員弁郡東員町大字山田字アリナガ	前方後円墳 28	石室？			有							大正4年ごろ発掘 員弁郡神田村大字山田字アリナガ
3	旧大長村大字長深北一色出土	員弁郡東員町長深	円	石室										1920年発見
4	新井水掛遺跡	桑名市大仲新田字新井水掛	不明	面袖式もしくは左片袖式横穴式石室	有	玄室中央							紋具	※
5	桑名宗社所蔵	出土地不明											三環鈴1	
6	御池5号墳	四日市市西坂部町字足洗	円 14m	無袖式複室横穴式石室	有	前室左側			鞍金具1				留金具4	
7	登城山1号墳	四日市市日永字登城山	不明	不明									馬具	明治43年10月9日発掘、石崎嘉太夫蔵 現物は行方不明 ※『四日市市史』1981四日市市役所
8	保子里1号墳	鈴鹿市国府町保子里	前方後円墳	石棺	有				鞍金具1対	木芯鉄板張壺片(紋具、兵庫鎖等)		双葉剣菱1 三葉文横円1	銅鈴9 鉸具1	
9	加和良1号墳	鈴鹿市三宅町西条	円 15	木棺直葬	無		内溝槽円形 1対	半球形2					紋具2	
10	太岡寺3号墳	龜山市太岡寺町	円 17.8	横穴式石室				脚？1		木芯鉄板張壺吊金具1対分	半球形6面1	菱形三葉文横円5+1?		※
11	井田川茶臼山古墳	龜山市井田川町	前方後円墳？円(20m)？	両袖式横穴式石室	無	1号石棺外	十字文横円形1	半球形8					銅鈴1 鉸具3 銅鈴(花形)3 銀(花形)2	
12	大塚B-6号墳	安濃町大塚字西山	円 18	横穴式石室	有	—	板状鏡飯付		鞍金具1	木芯鉄板張壺片	環状の円環2		鉸具1 飾鉾(花形)9 銀杏形4)	明治16年発掘
13	大塚C-1号墳	安濃町大塚字西山	円 16	両袖式横穴式石室	無	—							紋具1	
14	ツツミ2号墳	安芸郡安濃町大字東観音寺字ツツミ	円 9	左片袖式横穴式石室	無	袖部	無立間素環 2組分	環状、黄金具						補修痕あり
15	大里西沖遺跡	津市大里町合町		SK5	無	追葬の棺上	異形棘葉形 一対	環状			環状円環1	剣菱3		
16	六太A遺跡	津市大里窪田町		SR1	—	土坑中層	イ字形 一対	十字形1	木製両輪 3	木製壺2			紋具2	現在整理中
17	鎌切3号墳	津市神戸	前方後円 34	木棺直葬	無	棺内？	内溝槽円形 一対	半球形6						明治19年発掘
18	旧一志郡小森出土	津市高茶屋小森町	不明	石室？			槽							※
19	入田古墳	久居市庄田町入田	円 18.8	無袖式横穴式石室	有	奥壁		環状の円環部？1						
20	宮ノ下1号墳	一志町其郷字宮ノ下	円 10	左片袖式横穴式石室	有	奥壁		半球形？脚1	鞍金具1対				鞍金具1 他	※
21	小山A1号墳	一志町小山前田	不明	横穴式石室			十字文横円形1							
22	中野山10号墳	一志町八太字中野山	円	両袖式横穴式石室	追葬あり	奥壁	方形立間素環(振り手)1		鞍金具1	木芯鉄板張壺1対分				
23	中野山古墳群	一志町八太字中野山	円？	石室？									「鉄製馬具片」数個	
24	葉師谷7号墳	一志町八太	円 15	右片袖式横穴式石室	無	右側壁(奥寄り)			鞍金具1					
25	葉師谷14号墳		円 14	左片袖式横穴式石室	無	一周溝	方形立間素環 1対							
26	前田町厩遺跡・墳墓群	松阪市星台町		包含層	—	—	イ字形 1対	網合式(方形金具5・脚19+・黄金具10)					鉸具2	

番 号	遺跡名	所在地	出土遺構		竊取・盗掘の有無	馬具出土位置	面聚		鞍	鏡	冑聚		その他	備考
			墳形	主体部			簪	辻金具			雲珠	冑葉		
27	西野5号墳	松阪市雄野大花寺町西野	円 20	横穴式石室	有	奥壁	円形鏡板付簪1	組合式 金具4	輪鞍金具、鞍金具、鹿沼吊金	木芯鉄板張壺、片8	花形座付半球形8脚1	剣菱形? 片3 絞具3片		
28	天保1号墳	松阪市雄野島田町上野垣内	円 15	横穴式石室	有	玄室中央					半球形8脚1	剣菱形3	飾板(銀杏形)10	※
29	旧雄野町上野出土	松阪市雄野上野町					「クツツ」残片」						「鉄製馬具」	昭和9年発掘
30	山添2号墳	松阪市山添町上山	円 18	1号主体部(木棺直葬) 落ち込み部	無	足元、棺内	素環鏡板付簪1	半球形4			半球形1(8脚?)	三葉文横円形3		
31	八幡山古墳	松阪市大阿坂町福壽	円 28	木棺直葬? 3			鉄製簪							第2次世界大戦中に発掘、須臾器杯身に入った状態で出土
32	小野古墳群	松阪市小野町	円				「鉄製くつわ片」数個							
33	河田A6号墳	多気郡多気町河田字東谷	円 30	木棺直葬	有	頭部棺上?	方形立間素環 1対			木芯鉄板張壺片1			菱形・方形留金具各1	
34	河田A7号墳	多気郡多気町河田字東谷	不明	石片袖式?横穴式石室	有	玄室中央	絞具立間素環 1対							
35	河田B2号墳	多気郡多気町河田字東谷	円 12	木棺直葬	無	棺外、副葬品副葬部分?	方形立間素環1対(張り引手)		鞍金具2	木芯鉄板張壺1対				
36	河田B3号墳	多気郡多気町河田字東谷	円 10	木棺直葬	無	棺上							絞具2	
37	河田D6号墳	多気郡多気町河田					方形立間素環1対						絞具2	
38	立岡山6号墳	多気郡多気町大字相可字立岡山	円 16.5	木棺直葬			無立間素環 1対	半球形1						
39	明気1号墳	多気郡多気町大字相可字明気	円 19.5	木棺直葬	有		方形立間素環 1対							
40	石塚谷古墳	多気郡多気町大字荒蒜字石塚谷	円 30	木棺直葬(第2墓元)	有	足元、棺上?	方形立間素環1対	花形座半球形2		木芯鉄板張壺、2対	花形座付半球形8脚1			
41	曾柿崎3号墳	多気郡明和町上野字曾柿崎	円 約18m	木棺直葬(埋葬主体1)	無	棺外(足側)	方形透かし鏡板付1対		鞍金具1対					
42	塚山古墳群	伊勢市二俣町		石室?			鏡板1 衝若しくは引手金具						帯金具28? 絞具4 蛇尾14以上	
43	まこい号墳	伊勢市上地町まこい	円 約29m	木棺直葬?										
44	南山古墳	伊勢市鹿海町字南山	円 18m	左片袖式横穴式木室	無	奥壁 木室中央部	無立間素環1対 方形立間素環1対			木芯鉄板張壺、1対				
45	高倉山古墳	伊勢市豊川町高倉山	円	両袖式横穴式石室	有								馬具	
46	伊勢市神路山出土	伊勢市神路山											留金具	
47	旧外城田村大字宮古字谷口出土	度会郡玉城町大字宮古	円?	木棺直葬?			簪1				雲珠1			俗称矢塚 1914年発掘、旧外城田村大字宮古字谷口
48	八代神社蔵	鳥羽市神島					銅製鑲簪						留金具	※
49	志島10号墳(上村古墳)	志摩市阿児町志島布苔	円	横穴式石室 石棺有			十字文透心葉形1対	半球形1	覆輪片1		半球形12脚1、他半球形1			
50	治古墳	志摩市犬王町畔名字泊	前方後円墳	石室								十字文横円形1		甕鏡板の可能性? 真博
51	富岡前山古墳	伊賀市富岡字前山	円 12	横穴式石室	有	玄門近く左側壁 奥壁	鏡形1対(張り引手) 方形立間素環(張り引手) 1対	半球形		立間金具	四脚半球形	鏡形	菱形飾金具	
52	下中島2号墳	伊賀市平田字西谷	円 16	左片袖式横穴式石室	有	不明			鞍金具					

番 号	遺跡名	所在地	出土遺構		盗掘・盗掘の有無	馬具出土位置	面繋		鞍	鏡	尻繋		その他	備考
			墳形	主体部			槽	辻金具			雲珠	杵葉		
53	辻堂古墳	伊賀市中村字南浦	円 約20m 前方後円 円？	両袖式横穴式石室 組合石棺	有	奥壁、右側 壁、玄門	素環1(別達引手壺) 素環1(共達引手壺)							
54	寺音寺古墳	伊賀市牧村字流ノ鼻	前方後円 墳 53	不明									胡録金具1	
55	「轟の後の墓」	伊賀市鳳凰寺					2			輪鍔2			旧伊賀国山田郡 鳳凰寺村字轟の 後の墓	
56	キラ土古墳	伊賀市佐那具町字キラ土	前方後円 50	横穴式石室			「字」形 1対	環状			環状	刻菱形4		
57	奥小波田1号墳	伊賀市下友生字下小波田	円 20	木棺直葬 (埋葬主体1)	無？	棺外(頭 部側棺上)	鉄製内漆精円形 1 対	半球形 3					鉸具2	
58	杉之本1号墳	伊賀市才良字杉ノ本	円										馬具	關鑿により消滅
59	久米山1号墳	伊賀市四十九町立岡	横円 19× 13	横穴式石室			槽							昭和38年調査 名阪国道に より消滅
60	久米山44号墳	伊賀市守田町字北平尾	円 23	横穴式石室			素環 1対							
61	勝地大坪2号墳	伊賀市勝地字大坪	円 12.4	左片袖式横穴式 石室	無？	袖部～玄門 部			鉸金具1	木芯鉄板張壺鍔 3個体分				
62	桐ヶ谷15号墳	伊賀市阿保西ノ沢・桐ヶ谷	円 10	左片袖式横穴式 石室	有	奥壁埋土		環状の円環？						
63	四ノ切古墳	名張市蔵持町原出字四ノ切	円	横穴式石室			方形立間素環 1対			木芯鉄板張壺				昭和29年名張高校発掘
64	中村2号墳	名張市百合が丘西	円 20	両袖式横穴式石室					鉸金具1				菱形・方形留金具 各1	
65	上山9号墳	名張市夏見字上山	円 15m	左片袖式横穴式 石室	有	袖部			鉸金具1 覆輪?1					
66	丸尾山古墳	名張市赤目町星川字落シ谷	円 21m	左片袖式横穴式 石室	有	石室ほぼ中 央	橋円形鏡板付槽	方形組合式の方形金 具3						
67	天理参考館所蔵	推定三重県出土							海金具・磁金具					
68	徹古館所蔵	出土地不明										唐草文棘葉 形1		
69	徹古館所蔵	出土地不明						半球形1				唐草文心葉 形1		
70	徹古館所蔵	出土地不明										鳳凰文心葉 形1		
71	大岡寺5号墳	亀山市太岡寺町												
72	大岡寺6号墳	亀山市太岡寺町							鉸金具1対					
73	正知浦2号墳	亀山市椿世町	円 25	左片袖式横穴式 石室	有？	玄室中央				木芯鉄板張壺鍔 1対			菱形・方形飾金具 各1・留金具1	
74	字西三月田ニ於ケル古墳	津市高野尾町		石室？									武器馬具仏像等出土	
75	塚山3号墳	多気郡明和町竹川	円 15	木棺直葬？										
76	明気4号墳	多気郡多気町大字相可字明気	横円 30×24	木棺直葬			方形立間素環 1対							
77	「笠松山発掘品」	度会郡宇治山田町倭町 (現伊勢市倭町)					槽							
78	小上野墓谷2号墳	伊賀市真泥	円 15	左片袖式横穴式 石室	有	玄室中央	方形立間素環 1対	貴金具2		木芯鉄板張壺鍔 1対			鉸具片1・方形飾 金具1	
79	高嶽古墳群	伊賀市喰代					金具残片、槽？							明治年間出土
80							鉄地金銅張鏡板					鉄地金銅張 杵葉		大正元年(1912)頃出土
81	長田古墳群	伊賀市長田・三軒家											鉄製馬具	昭和39年8月採取
82	長屋ハツ塚古墳群	名張市長屋 (現名張市赤目町相桑)					槽							昭和30年出土



第14図 三重県内出土馬具分布図